

# 教育委員会協議会 会議録

平成29年度第6回教育委員会協議会

場所：四万十市立中央公民館

## (1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成30年1月24日(水) 18:00

閉会 平成30年1月24日(水) 20:42

## (2) 教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	田村 壮児
	教育委員	平田 健一
	教育委員	竹島 晶代
	教育委員	八田 章光
	教育委員	中橋 紅美
	教育委員	木村 祐二

## (3) 高知県教育委員会会議規則第8条、第9条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長(総括)	北村 強
〃	教育次長	藤中 雄輔
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	高等学校課課長	高岸 憲二
〃	高等学校課企画監(再編振興室長)	山岡 正文
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子
〃	高等学校課指導主事	野中 昭良
〃	高等学校課指導主事	清水 宏志(会議録作成)
〃	教育政策課指導主事	小島 文晴(会議録作成)

## 【開会】

田村教育長	<p>ただいまから、県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関する、第6回高知県教育委員会協議会を開会させていただきます。最初にご挨拶を申し上げます。</p> <p>本日は、県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関する、高知県教育委員会協議会を開催いたしましたところ、雪もちらつくような大変寒いなか、土佐清水市の泥谷市長様、弘田教育長様、黒潮町の大西町長様、坂本教育長様、四万十市の徳弘教育長様、宿毛市の出口教育長様には、ご発言をいただくためにご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。また、そのほかにも、この問題に関心を持っていただいております多くの皆様にご出席をいただいております。大変ありがとうございます。</p> <p>この県立高等学校再編振興計画につきましては、急減する生徒の動向を見据え、また、南海トラフ地震による津波への対応を考慮しながら、グローバル化、情報化が進み、変化の激しい時代に対応した、より望ましい教育環境の実現を目指した県立高等学校の在り方を示そうとするものでございます。平成26年10月に、平成26年～30年度を計画期間とした「前期実施計画」とともに策定</p>
-------	--

竹島委員	<p>をしております。</p> <p>この「前期実施計画」の中では、高知南高校と高知西高校の統合ですとか、須崎工業高校と須崎高校の統合も決定しておりますけれども、この「前期実施計画」の期間中ということは、平成 30 年度中に、平成 31 年～35 年度を期間といたします「後期実施計画」を策定するというにしております。そうしたことから、昨年の 10 月から、この教育委員会協議会を開催させていただいております。</p> <p>県立高等学校につきましては、それぞれの地元の皆さんに大変お世話になっておりますと同時に、一方では県立高等学校に様々なご期待もいただいていると感じております。そういったことから、今回の検討に当たりましては、それぞれの地元に出向きまして、ご意見を伺うということにいたしました。県内 5 地域に順番に出向かせていただいて、ご意見を伺っているところでございます。今回は、そういった会の最後の会ということになります。</p> <p>もともと、この県の再編振興計画につきましては、「前期実施計画」では、県教育委員会の内部で内容を検討し、それを固めたうえで、色々のご意見を伺うということにしておりますけれども、今回につきましては、先ほど申しましたように、地元の皆さんに大変関心を持っていただいているということを踏まえまして、まずは、ご意見を伺ったうえで、できるだけそのご意見を反映する形で、「後期実施計画」をつくっていきたいということで、こうやってお邪魔させていただいているということでございます。</p> <p>今日はどうぞよろしくお願ひしたいと思います。簡単ではございますけれども、ご挨拶とさせていただきます。</p> <p>それでは、始めたいと思います。本日の議事録への署名人は竹島委員、よろしくお願ひいたします。</p> <p>はい。</p>
------	---

**【議題】**

**○県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」の策定について**

田村教育長	<p>それでは、県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」の策定について、高等学校課から説明をしてもらいます。</p>
山岡企画監	<p>資料につきまして説明をさせていただきます。高等学校課企画監の山岡です。1 ページです。県立高等学校再編振興計画の実施計画の後期分の策定スケジュールを載せております。</p> <p>まず、「後期実施計画」の「中間とりまとめ（たたき台）」を今年 4 月に策定するに当たり、昨年 10 月より教育委員会協議会という公開の場で、広く県民の皆様の意見を聴きながら、取組を進めてきています。この教育委員協議会は、1 回目は全体会とし、2 回目～6 回目までは、地域別に各地域内の学校について、意見を聴く会として地域会を開催しています。7 回目以降は、地域会で出た意見を踏まえながら、「中間とりまとめ（たたき台）」の策定に向けて、委員の皆様にご協議いただくことにしています。最終的に、12 月ごろには「後期実施計画」を策定したいと考えています。</p> <p>続きまして、2 ページをご覧ください。津波浸水域の県立高等学校一覧でご</p>

ざいます。津波浸水域にある県立高等学校は、13校あり、最大クラス（L2）の地震・津波が発生した場合で、堤防なしの時の浸水深と、30cmの津波が到達するまでの時間を表にしています。浸水深が最も大きいのは、土佐清水市の清水高校で、浸水深が12mであり、この地域では、宿毛高校が7mとなっています。また、30cmの津波が到達するまでの時間が最も短いのは、同じく清水高校が11分であり、この地域では、宿毛高校が35分となっています。

続きまして、3ページをご覧ください。地域別中学校卒業生数の推移でございいます。平成29年3月の卒業生は、下の表に出ていますけれども、6,543人であり、平成25年3月を基準とした場合、4年間で▲（マイナス）238人、▲3.5%となっていますけれども、平成35年3月を見てみますと、卒業生は5,543人ということに減りまして、10年間で▲1,238人、▲18.3%となっています。

続きまして、4ページをご覧ください。平成27年度以降の入学者数又は在籍者数でございいます。先に、県立高等学校再編振興計画における生徒数の最低規模について、ご説明いたします。全日制の本校の最低規模は、1学年2学級以上を必要としています。ただ、過疎化が著しく近隣に他の高等学校がないといった中山間地域の学校、そして、不登校や中途退学を経験した生徒、発達障害のある生徒などを受け入れる体制を整えた学校は、最低規模を1学年1学級20人以上としています。また、分校は、最低規模を1学年1学級20人以上としています。また、定時制夜間部の学校は、学校全体の生徒数、在籍者数を20人以上に緩和し、各地域での維持に努めることにしています。それぞれの学校の最低規模がどのようになっているのかは、表の右に「最低規模」という欄があり、該当するものに「●（丸）」を付けています。この一覧表の所、あとは数字を平成27、28、29で、入学者数、在籍者数を書いていますので、該当の所をご覧くださいいただければと思っております。

続きまして、5ページをご覧ください。平成24年度以降の県立中学校の入学者募集の資料です。この地域では、県立中村中学校が、定員70人に対しまして志願者が最も多いのは、平成25年度で164人、倍率が2.34倍です。最も少ないのが、平成29年度で87人、1.23倍となっています。

続きまして、6ページをご覧ください。検討すべき事項でございいます。適正規模の検討に当たりましては、単に生徒数だけで決めるということではなく、それぞれの学校の持つ、学びの機会の保障といった重要な役割、そして、学校や地域の振興策も踏まえて、検討していきたいと考えています。また、本日の地域会で地域の皆様からのご意見を十分に聴きながら、取り組んでいきたいと考えています。

1の「前期実施計画」からの継続検討事項の所で、「○（丸）」の2つ目にありますように、中村高校西土佐分校は「前期実施計画」のなかで、2年連続して入学者が20人に満たない状況になった場合、その翌年からの募集停止を検討するものとされています。その下ですけれども、宿毛高校は、「前期実施計画」のなかで、南海トラフ地震による津波への対応のため、適地への移転の可能性も含め、将来の学校の在り方を検討していくものとされています。清水高校については、「前期実施計画」のなかで南海トラフ地震への対応のため、高台への移転を検討するものとされています。

続きまして、2の（2）でございいます。西土佐分校は、2年連続して入学者数が20人以上を下回っております。それは4ページの方にもありましたけれ

	<p>ども、2年連続して20人以上を下回っているという状況でございます。</p> <p>そして、2の(5)でございます。清水高校につきましては、定時制が、平成27年度と29年度に入学者が20人以上というのを下回っており、4ページに書いてあるとおりでございます。説明は以上です。</p>
田村教育長	<p>今、説明してもらいましたけれども、この件は、これまでも何回か説明をさせていただいているということです。委員の皆さん、よろしいでしょうか。</p>
各委員	<p>はい。</p>

### ○幡多地域の県立高等学校の現状、今後の状況について

田村教育長	<p>それでは、引き続き、幡多地域の県立高等学校の現状、今後の状況について高等学校課から説明をしてもらいます。</p>
山岡企画監	<p>資料7ですけれども、「前期実施計画」で明記した学校の在り方に係る現在の状況でございます。これにつきましては、A3の表の左の部分、「前期実施計画」で明記した学校の在り方ということで、右で29年10月現在の状況を、それぞれの学校につきまして、全日制、定時制、通信制といった形でそれぞれ書いております。例えば、大方高校につきましては、学校運営協議会を通じて地域連携を深めていますとか、「世界津波サミット」への参加を契機として、地域貢献を視野に入れた防災教育に取り組んでいると、書いていただいております。これにつきましても、皆さんの方でご覧いただければと思っております。7ページには、大方高校、幡多農業高校、中村高校・中村中学校、そして、8ページには、中村高校西土佐分校、宿毛工業高校、宿毛高校、清水高校という順番で記載しております。</p> <p>続きまして、9ページをご覧ください。資料3にありました地域別中学校卒業生数の推移の内訳を、合併前の市町村ごとに出したものでございます。平成29年3月は、幡多地域全体で739人ですけれども、9年後には、548人にまで減少することが見込まれています。私立高校などに行く生徒を除いた数字となっておりますので、現在の中学生の人数とは、必ずしも一致しておりません。</p> <p>続きまして、10ページをご覧ください。中学生の出身市町村における小学6年生の人数です。県立中村中学校では、幡多地域6市町村と四万十町ですけれども、平成29年度、761人が、5年後には692人となることを見込まれています。説明は以上です。</p>
田村教育長	<p>今の件について、ご意見ご質問ございますか。特にならなければ、地域からのご意見を伺うことにしたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。</p>
各委員	<p>はい。</p>

### ○地域からの意見聴取

#### ア 黒潮町

田村教育長	<p>それでは、地域からのご意見を伺うということに移らせていただきます。初めに、黒潮町の方からご意見をお願いしたいと思います。どうぞよろ</p>
-------	--

黒潮町  
町長

しくお願いします。

黒潮町からまいりました大西と申します。本日はこのような個別の機会をいただきまして、本当にありがとうございます。平素の県教委の皆さんのご支援とご協力に、併せて感謝を申し上げる次第です。

それでは、いただいた時間に限りがございますので、早速入らせていただきたいと思います。主に前に示させていただいております、パワーポイントの方をご覧になっていただきながら、意見を申し上げたいと思います。

まず、本会の趣旨でありますけれども、大方高校のみについての言及ですと、自分たちが考えるところ、その本心についてのご理解がなかなかいただけにくいのではないかと感じて、前半は黒潮町として今どのようなことを考えているのかをご説明させていただきます。

黒潮町として教育及びその環境についてどう考え、そしてまた今後、何をどう目指していくのか、そのなかで大方高校との関係性と、具体的なアプローチ・プログラムについて述べたいと思います。

これは少し関係ないかと思われるところもあろうかと思っておりますけれども、全体をご理解をいただくためと思っております。お聴きいただきたいと思っております。

まず、黒潮町の教育分野における計画体系です。これまでは、町教育行政の云々云々の大改正・法改正がございまして、それに基づいて新体制を整備し、教育大綱を整理いたしました。

それに基づきまして、教育振興基本計画の見直しを図り、平成 27 年度に制定いたしました総合戦略にも、教育委員会の所管する様々な取組が記載されていることになっておりました。

現在、進めておりますのは、教育大綱に基づく教育振興基本計画の見直しです。これは当然のことでございますけれども、それプラス、総合戦略の色々なところに散らばっておりました教育委員会所管の部分、主に教育という視点からの記載です。こちらは総合戦略のなかで、第 3 部の教育基本計画として、独立した計画として取りまとめを行っておるところでございます。昨日、総合教育会議にその案を示させていただいたところです。

それでは、後方に基づきまして意見を述べたいと思います。まず、パワーポイントの最上段をご覧ください。黒潮町の目指す児童生徒像についての記載でございます。

当然のことながら、私たちの目指す児童生徒像、そして人づくりの、まちづくりの根幹であり、未来であります。自分たちは、いかような児童生徒像をにらんでいるのか。それが、最上段の記載であります。ふるさとを愛し、ふるさとに誇りが持て、そしてふるさとの課題を見つけ、提案、解決、人の役に立つ生き方ができ、名前呼び合える人間関係を構築でき、コミュニティの一員としての自覚を持った児童生徒となっております。

この目標とする児童生徒は、思いつきで記載したものではございません。ここ数年かけまして、保育士さんをはじめとする保育現場、あるいは、学校教職員をはじめとする学校現場へのヒヤリングを重ねながら、この目標に到達したところでございます。

さらに、児童生徒像ですが、この人材を育成していかなければなりませんけれども、先ほど申し上げましたように、人づくりはまちづくりの根幹でありま

す。

われわれ行政は、そのまちづくりを主体的に担う最大の集団であります。まちというのは様々な関係性と、その総和であると考えております。もし、この関係性が存在しないということになりますと、それは単なる生活エリアの線引きに過ぎず、私たちが目指す、あるいは、私たちが認識するまちというものは、かなりの相違がございます。

そのために、人間関係は元よりコミュニティの一員としての自覚を持ち、主体的に地域に関わることができる素養を育むことが、大変重要だと考えております。

誤解のないように申し上げますと、これは黒潮町で育つ児童生徒、子どもたちを黒潮町に縛り付けるために教育をやっていくという観点ではございません。将来どこに住んでおられようとも、まず、一番大事なものは、学びの過程を経て、社会に有益な人材を輩出することです。

それからもう一つは、その学びの過程を経て、将来にわたって、人生を通じて幸せを感じることができる、その力を持った人間を育てていくことが大変肝要だと思っております。

従いまして、黒潮町でこれから説明いたします「ふるさとキャリア教育」を講じてまいりますけれども、これはふるさと黒潮町に住んでいなければ、この効果が実現されないといったものではございません。先ほど申し上げました2番目の特性、どこに住んでいても、幸せをしっかりと人生を通じて感じていただける人材の育成、それに寄与するものだと思っております。

次に、その実現のための具体的なアプローチにつきまして、簡単に説明をさせていただきます。少し字が小さいですけれども、右側の赤字部分になります。

今後、強気に推進していこうと思っております「ふるさとキャリア教育」です。これは第3部の教育基本計画に、最大の目玉として政策を掲げております。この「ふるさとキャリア教育」の最大の特徴は、教育を学校現場にすべてお任せ丸投げするのではなくて、地域総がかりの町民運動として展開していくことと位置付けていることが最大の特徴であると自分たちは考えております。

これまでも、各学校で取り組んでいただいていた地域学習をさらに強化し、地域を挙げて取組を進めるということでもあります。具体的には、地域と学校をつなぎ、ひと・もの・ことといった、地域の教育資源を掘り起こし、それを教材化し、授業に生かし、あるいは生涯学習を強気に推進するということでもあります。

これらの「ふるさとキャリア教育」の実効性を高めるためにも、全体プロセス、そしてコーディネートができる人材を、専任配置する予定としておりまして、当初予算にもその予算が計上されているところです。

ふるさとをしっかりと学んでいただいて、そして、そのことにより、ふるさとへの愛着や誇り、そして貢献意識を育み、地域で実践することで、コミュニティの一員としての自覚を促し、そして社会に出た時に自分を見失うことなく、即応できる人材育成のプログラムを講じてまいりたいと考えております。

リカレント教育としての生涯を通じての学び、それから、学齢期における年代別の具体的な取組については、パワーポイント中央の縦軸をご覧ください。

まず、最下段、0歳の家庭における基本的な生活習慣の学びと徹底に始まり、保育所、小学校、そして中学校と年代が上がるにつれて、それぞれの年代に応じたプログラムを設定し、これらを学校現場にすべてお任せするのではなく、行

政、地域を挙げてコミットしていく取組といたしております。

地域にある、地域の伝統文化から各種産業および、それらを担う人材まで、教育資源としてフルに活用し、地域総がかりで学び合うことができる取組、それが私たちの目指す広義の意味での「ふるさとキャリア教育」になります。

さて、本題の大方高校について申し上げたいと思います。これまで説明をさせていただいてまいりました「ふるさとキャリア教育」を強力に推進するためには、どうしても必要不可欠な存在であります。そもそも、「ふるさとキャリア教育」の体系的な取組は、私たちに先駆けてもう、取組を行ってきていただいているところです。

左が少し見にくいかもしれませんが、平成 17 年に大方高校として開校して、当初から今日に至るまで一貫して、「自立創造型地域課題解決学習」の取組を推進していただいております。平成 17 年度に、全国のモデルとしてスタートしましたこの取組、スタートして以降、今日に至るまで継続しているのは、全国で大方高校のみとお伺いしております。

この取組が息の長いものになった要因といたしましては、学校現場のご努力や県教委、並びに高知大学の一貫したご指導のみならず、学校運営協議会、左側の横矢印の最下段にある「コミュニティ・スクール」と記載させていただいておりますけれども、これは地域が参画して学校を運営していくことを意味しています。その運営母体になります学校運営協議会の積極的な協力、あるいは参画があつての賜物だと考えております。

パワーポイント左側下段にございますように、この取組を通じ、交渉力から実行力に至るまでの広義の意味での実践力をしっかりと育み、課題解決能力を有することで、社会に出た時に即応、そして貢献できる人材として育て上げることができます。これは学校のみならず、地域の責務であると考えております。

大方高校のこれまでの取組において、地域の皆さんにまずご参画をいただき、そして課題を設定、解決策を考え実践する。最終的に審査会にかけられまして、評価をいただくという取組になっております。

このノウハウは、私たちがこれから目指そうとする「ふるさとキャリア教育」の一環として、しっかりと位置付けることで、これまで以上に密な連携が図られるものであります。また、その相乗効果を期待するところです。これらは、先ほど申し上げましたように、地域の責務であると同時に急務でもあります。

ちなみに、行政、あるいは地域がいかように、この「自立創造型地域課題解決学習」にコミットしてきたかを、少し例を挙げてご紹介をさせていただきます。

まず、私事になりますけれども、先ほど申し上げましたように、この学習を経て、最終的には審査会が開催されるわけですが、そちらの方の審査員として、毎年お招きをいただき参画をさせていただいております。途中でご紹介させていただきましたように、学校運営に地域が参画している運営母体がコミュニティ・スクール、「学校運営協議会」であります。本日同行いただいております教育次長は開校以前からのコミュニティ・スクールの構成委員であります。現在は、その座長をお務めいただいております。もう既に、息の長い取組となっているところです。

それから、行政あるいは民間、民間のなかでも産業従事者、あるいは NPO 職員、こういった人材が大方高校へ積極的にコミットをし、「自立創造型地域課題解決学習」のプレイヤーとしてミッションを与え、共に解決学習を行い、

そして実践をしていく。そういった積極的な関与をこれまでずっと行ってまいりました。今後も当町の推進しようとしている「ふるさとキャリア教育」の一環として、大方高校をしっかりと位置付け、これまで以上に人材派遣を主軸に積極的にコミットをしていきたいと考えております。

また、大方高校にはご案内のとおり、定時・通信制もございます。リカレント教育の一環として、学ぼうとする皆さんに過度の負担を強いることのないよう、具体的に申し上げますと、物理的な色々の協力になろうかと思えます。しっかりと配慮し、継続していかなければならないと考えております。

総理は、今般の施政方針演説の中で、80歳を超えてコンピュータを学び、ゲームを開発された若宮正子さんについて言及をされております。何らかの事情で、学校に通うことができなかった皆さんへの学びの場の提供、そういった視点のみならず、人生100年時代、学齢期の教育だけでは不十分で、学び直しと新たなチャレンジの機会を確保し、リカレント教育の抜本的な拡充を行うとしております。これら言及されている部分は、黒潮町が今後取るべき姿勢、そしてまた方向性も全く同様でございます。今後は当町と大方高校のさらなる連携をもって、目的を果たしてまいりたいと考えております。

これまでも、大方高校は地域で様々な取組を行ってきていただきました。毎年行われております、「クリエコ活動、クリーンエコデー」は、もうすっかり町民行事として定着をいたしておりますし、地域でも高い評価をいただいているところです。また、学校運営については、配慮を要する生徒さんへの支援体制を含め、総合的な学校運営の体制について、保護者の方から高い評価をいただいているとお伺いをしているところです。

1例として、一昨年には県教委の皆様にも大変お世話になり、我が国を含む世界30カ国から、361名の高校生と、そして大勢の関係者の皆様にご当町にお越しいただき、「『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮」を開催させていただきました。ご案内のとおり、使用言語が英語で、英語による世界会議を、当時、大方高校1年生でありました女子生徒お2人に、議長として取り仕切っていただきました。このことは、彼女たちだけではなく、大方高校の生徒にとりまして大きな自信となったことと思えますし、地元で生きる私たちにとりましても、大変大きな誇りであります。また、その後、世界各地から高く評価をいただいたところです。会議が行われた両日は、多くの地域の住民の温かいご協力がございましたが、これらもすべて、大方高校がホスト校であったことが、大きな要因であることは言うまでもないところです。

このように、地域に支えられてきた大方高校と、これまで以上に積極的にコミットしていくことで、学校での学びの枠組みを超えた人づくり、まちづくりを共に推進してまいりたいと考えております。

特に近年、注目されております人口減少社会における自治体の在り方、あるいは地域の在り方、あるいはまちづくり、あるいは人々の様々な形態、生活体系、こういったものを将来見越した時に、もはや高校だけで、あるいは中学校だけで、あるいは行政だけでという時代はとっくに終わっていると思えます。

黒潮町の地域運営をするのに必要な人材を大方高校から輩出していただく。そのために積極的に、行政、民間を問わず、地域として総合的にコミットしていく。これはあるべき姿だと思っておりますし、その旨を先ほど紹介させていただきました総合戦略第3部の教育基本計画の中に目玉の政策として記述をさせていただきます。次年度から本格的な取組がスタートしようとしているところ



	<p>です。</p> <p>この取組が進むにつきましては、県教委の皆様のさらなるご指導、ご支援、そして大方高校の皆様の深いご協力と、そして行政、地域住民の深い理解が何よりも大事なものと思っております。そのムード醸成につきましては、自分がしっかりと責任を持って果たしてまいりたいと考えております。</p> <p>以上、黒潮町の考える全体像についての簡単なご説明と、それから大方高校のこれまでの取組、そして今後、大方高校と地域、行政、民間を問わず、地域とのコミットがいかようにあるべきなのかという意見を申し上げさせていただきました。</p> <p>いただいた時間にも限りがございますが、説明は以上でございますけれども、不足部分につきましては、ご質問をいただければと思います。よろしく願いいたします。</p>
田村教育長	<p>どうもありがとうございました。黒潮町の教育方針について、大変熱く語っていただいたところでございますけれども、委員の皆様から、ご意見ご質問ございましたらお願いします。</p>
八田委員	<p>今日はありがとうございました。それから、黒潮町は大変意欲的な教育姿勢をお持ちで、大変感動いたしました。それから、高校への支援を非常に積極的にやっていただいて、ありがとうございます。</p> <p>黒潮町としての大方高校の位置付けは非常にはっきり分かったんですけども、今回、ほかの高校についても、いろんな見方をしなくてはいけないということで、黒潮町の中学生の視点から見て、幡多地域のほかの学校に対する何か希望、あるいは進路選択としての県立高校の在り方を、黒潮町の中学生の目から見たらどうなのかを1点お聞きしたいです。それから、逆に大方高校を幡多地域の学校として位置付けるにはどう見るべきなのか、その2点を少しお話いただければと思います。</p>
黒潮町町長	<p>満足いただける回答ができるかどうか分かりませんが、中学生の意向を踏まえたうえで、他校を選び求める姿があると思います。</p> <p>分析がまだ浅いと思うんですけども、中学生の皆さんが卒業を考えられた時に、いかような判断基準をもって学校を選定されるのかといったことは、おそらく近接性ももちろんありまじょうし、学力レベル、クラブ活動なんかも近年ではかなり重要視されていると思っております。</p> <p>ご質問いただいて、全体を俯瞰して見ますと、きれいにもう配置がされているのは、この幡多地域ではないかなと実感しているところです。</p> <p>先ほども申し上げましたように、これから黒潮町は、保育園児からリカレント教育の熟年まで、全体的にキャリア教育を進めていこうとしています。例えば、大方高校でテーマは黒潮町というフィールドになるかも分かりませんが、黒潮町で黒潮町をフィールドとして学習をいただくことが、黒潮町に縛り付けるといった目的ではありません。例えば、土佐清水市からご通学をいただく生徒にとりましては、高校過程において高校が立地する地元の黒潮町について学ぶことで、土佐清水市にも思慮が深まることでしょう。ふるさとに対する愛着も深まるものだと思います。</p> <p>そのため、黒潮町のいいところを押し付ける教育を、これから自分たちはや</p>

っていこうとしているのではなくて、ふるさとへの愛着であるとか、ふるさとへの尊敬の念であるとか、ふるさとへの貢献意識であるとか、そのような意識を育てていただきたい。

これはふるさとをキーワードにしておりますが、冒頭の説明でも申し上げましたように、これから自分たちが経験したことの無いような時代を、また想像もできないような時代を、今の児童生徒は過ごしていかなければならないと考えています。そういった時に、幸せの定義を自分たちは果たして示すことができるのか。そう考えますと、自らの手で幸せを勝ち取る、それから、勝ち取るというフレーズが少し自分には違和感がございまして、人生を通じて幸せを感じることができる。これについては、やはり生まれ育ったふるさとというのは、大きなキーワードではないかと思っています。

従いまして、先ほどからご質問いただきました中学生の意向、それを踏まえたうえで幡多に位置する各高校でも、ふるさとへの愛着であるとか貢献意識であるとか、それぞれの学校で取組を強力に推進していただくことができれば、この幡多圏域の児童生徒は、しっかりと将来にわたって、人生を通じて、幸せを感じることができる力を学び取ることができるのではないかと期待をしているところです。

幡多地域における大方高校の位置付けということでございますが、先ほど県教委の方からもご説明いただきました。資料の中にも載っておりますが、他校と比べまして、少し配慮を要する生徒さんへの支援体制は、大方高校は非常に充実していると考えております。

学びたい人間が学ぶことができないという環境を、自分たちは絶対つくってはならないと思っています。言葉が適切かどうかは分かりませんが、その受け皿機能としての体制というのは、大方高校は既に有していると考えております。現段階では、もしかすると大方高校を目指される方のなかには、もうそういった機能を欲した方が進学されてくると思います。現実的にはなっておりますかと思っておりますけれども。

その機能はしっかりと残したうえで、かつ、他校と競争ということではありませんが、自分の高校に誇りを持っていただくためには、大方高校はこうなんだよっていう色を出していくことが大事です。

それが他校にも影響することで、幡多地域全体の高校が切磋琢磨をして、その機能が向上できれば、それは大方高校が幡多地域にとって、必要な高校であるということの証明であろうかと思っております。また、そういった姿を目指しながらも、しっかりと学びたいという生徒が学ぶ場がない。こういった環境を絶対つくってはならないと思っています。その環境をしっかりと自分たちは継続させていきたい。そのために、行政、民間を問わず、積極的にコミットしていきたいと思っています。

幡多地域にあるそれぞれの高校と共存しながら、しっかりと役割分担を進めていくことは、僕は可能だと思っております。そのなかでも、大方高校にはこういう魅力があるよという発信も不可能なことではないと思っております。

中橋委員

ご説明、ありがとうございます。1点、質問をしてもよろしいですか。先ほどの話と被るかもしれませんが、大方高校はここ数年、定員に対して、かなり人数が少ない状況が続いているわけですがけれども、町長さんから見て、大方高校がこういう高校であれば、今、黒潮町が目指すビジョンにより近づく

黒潮町  
町長

し、また幡多地域からよりたくさんの生徒が集まるんじゃないかという何かアイデアとか希望があれば教えていただきたいと思います。

黒潮町では、義務教育過程で、東京大学の片田先生にご監修をいただいて、「防災教育プログラム」に基づいて、防災教育を施しています。定義上、防災教育という名称で、教育現場では使っていますが、中身は命の教育ということになっております。自らの命であったり、他者の命に思いをはせることで、単なる防災知識を詰め込むという教育ではなくて、しっかりと人生を見据えることができる教育の中身になっています。

これを通じて実感したのは、自分たちはもしかすると、いわゆる大人で、大人世代である自分たちは守る側で、子どもたちは守られる側、だから自分たちは守る側として守られる側に教育を施すと。こういった視点を持っていなかったかと、今すごく反省しています。

防災をずっと突き詰めていきますと、今、黒潮町の防災は世界にも注目されていて、色々な視察が来られますが、内情では結構ジレンマがありながら、色々な課題に向けて、どう解決のアプローチがあるんだろうかと、悩みながらやっているのが現実です。

一つヒントと言いますか、これが答えじゃないかと思うのは、地域を挙げてとか、大人を挙げて子どもたちを守るっていう構図で、今まで、もしかしたら自分たちは意識していたのかも分かりませんが、今後は子どもたちが、もしかすると地域を守ることになるのではないかと感じています。

つまり、理論立てて、論理としてご理解いただくための説明能力というのは、自分たちの方がきっと長けていると思います。

ただし、行動に結び付かないと全く防災効果はありませんので、その行動を誘発する能力、これは子どもたちは非常に長けています。子どもたちがやることに関して、大人を巻き込む力がものすごい大きいです。

従って、大方高校にご進学いただく生徒さんには、自分たちも積極的にコミットをし、学校現場にもどんどん訪問させていただきたいと思っております。逆に、大方高校の生徒さんにどんどん地域に入って来ていただきたい。そう考えています。

地域に入るとどういう効果が生まれるかは、地域の皆さんがそれを潜在的に求められているということがまずあって、地域に入って来た高校生は、おそらくかなりの評価を受けると思います。この評価がおそらく、自己有用感や自己肯定感に結び付いて、繰り返しになりますが、人生を通じて幸せを感じることで、その幸せを感じる力の獲得になっていくのではないかと考えています。

それを体系的にしっかりと整理をされて、それを対外的にしっかりと情報発信ができる、そこまで至った時には、僕は、黙っていても大方高校に来てくれるんじゃないかなと思っています。決して、夢物語で言っているわけではございません。ここ数年間の防災の取組から実感したことを申し上げているところです。従いまして、今なんとなくこういうところに行くんじゃないかという道筋だけですけれども進めていけば、そんなに時間はかからずに具体的なアプローチを構築していくことができると思います。

しっかりと情報発信していこうと思います。それによって大方高校にどんどん人が来ていただける。大方高校の定員をオーバーしたら、他校の方にご受検いただければ結構かと思っています。

竹島委員	<p>「ふるさとキャリア教育」という点で、保幼小中との連携、あと地域と学校とのつながりを画面を見て感じたんですけども、一番力を入れている防災という観点で、やっぱり幡多地域全体から生徒をなんとか大方高校へとお考えですね。アクセスもすごくいいですし、主な出身中学校を見ても、中村中学校、中村西中学校辺りからも来てますし、これからもぜひ、この少子化のなかで、まずは学生の確保を頑張っていたきたいと思います。ありがとうございました。</p>
木村委員	<p>町長さんの地域総がかりによる「ふるさとキャリア教育」というビジョンにある種感銘を受けました。それを進めるなかで、本当に必要になってくるのは、従来からあります学校運営協議会のような地域を挙げての取組と同時に、小中高の連携というものが本当に必要になると思うんです。よく言われることではあるんですけども、本当の意味でベクトルを合わせた小中高の連携というのは、意外と難しいように思うんですが、それを具体的にどういった形で連携していくのかというプランがございましたら、ぜひお教えいただきたいと思います。</p>
黒潮町 町長	<p>まず全体的なマインド、本当の意味でのコンセンサスが取れて統一されるには、少し時間はかかるかと思いますが。</p> <p>ただし、自分たちが期待するその取組をスタートするキックオフの段階での基軸となる要素といいますか、有力な要素といいますか、そういったものを期待するところは2つございます。</p> <p>一つは、ご紹介いただきました防災です。黒潮町の義務教育課程のなかで、防災教育をしっかりと施された人間が大方高校へ進学していただく。そうすると大方高校には、黒潮町の義務教育課程を経た人間ばかりではないので、おそらく意識レベル、知識レベルの差はあろうかと思いますが。そういったなかで、しっかりとイニシアティブを発揮していただく。大方高校の全体の防災教育のレベルアップにつながる。そのつながったことが実感できて初めて、ああ黒潮町の小中学校の防災がこういった形で大方高校の防災に生きているんだなと実感をいただくことがまず一つ、同じ方向を向ける一つの糧になるのかなと思います。</p> <p>それからもう一つは、繰り返しになりますが、「ふるさとキャリア教育」です。自分たちがこれから本腰を入れて強力に推進していこうとしている「ふるさとキャリア教育」に先んじて、大方高校は先行して取組をスタートしていただいております。そのノウハウを自分たちがしっかりと学ぶこと、そして自分たちの義務教育課程で、あるいは保育過程で、保幼小中としっかりとした「ふるさとキャリア教育」を実践したい。真の意味での「ふるさとキャリア教育」の理解をした人間が、大方高校に進学いただきたい。そこでさらに大方高校が独自に取り組んでいる地域課題解決学習に参画することで、より高みを目指していく。先ほど申し上げましたように、それが実感できて、初めて同じ方向を向くことができるのかなと期待するところです。</p> <p>従いまして、基軸を2つと申し上げましたが、ほかにも様々な要素はあろうかと思いますが、まずはこの2点からスタートするのも決して夢物語ではないのかなと思っています。</p>

<p>平田委員</p>	<p>町長さん、本当に今、黒潮町の教育にかける想いを熱く語っていただきまして、私も論理的なお話を聴きまして、大変感動をいたしました。</p> <p>幾つかお話もしたいんですけど、一つには、グローバル教育っていうのは、国境を越えてだとか、色々なお話もございまして、私自身は、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持たず子どもをつくるっていうこと、そのバックボーンがあって、グローバルな社会へ子どもは入って行けると思いました。まさに町長さんが思っておるように私も考えました。ぜひ黒潮町のふるさとを誇りに持つ子どもをたくさん作っていただきたいと思いました。また、大方高校につきましても、大変熱い想いで、こういう高等学校にならないといけない。支援をたくさんの方から色々研究していただいているようでして、教育基本計画も作成していただいて本当にありがたいなという思いでお話を聴かせていただきました。</p> <p>先般、「高校生津波サミット」があり、町長さんも出席をされており、昨年の世界サミットのお話もしていただきました。参加してつくづく思ったことは、子どもが中心になって地域の命を守るんだということ。これはまさしく徳の教育そのものだと思いますね。ぜひ、黒潮町がそういう子どもたちの徳の教育に突出した子どもというものをとおして、やはり知力だとか、ふるさと貢献だとか、ふるさとの創生へつながっていくと感じました。</p> <p>ぜひ、町長さんのお話のあった内容を実行して、ますます黒潮町の教育が地域そのものをリードしていく市町村であっていただきたいなと思いました。それと、高等学校の「自立創造型地域課題解決学習」教育におきましても、課題解決学習っていうのは、これから世界の様々な、想定ができない社会を生きていくためには、子どもたちに身に付けていただく必要な資質だと思います。ぜひ、こういう視点も高等学校と連携をして、黒潮町の創生とか黒潮町の子どもたちの貢献力とかを育てていただきたいと思いました。本当に力強い様々なお話、ありがとうございました。</p>
<p>田村教育長</p>	<p>本当に、黒潮町の「ふるさとキャリア教育」を中心にして、大方高校に対しての色々なご期待もお話いただきました。どうもありがとうございました。</p>

## イ 四万十市

<p>田村教育長</p>	<p>次に四万十市の方から、お願いしたいと思います。</p>
<p>四万十市 教育長</p>	<p>四万十市の教育長の徳弘でございます。日ごろは、県教委はじめ、各関係の皆様には、四万十市および四万十市の教育行政に何かとご指導ご支援いただきまして、誠にありがとうございます。この場を借りまして、厚くお礼を申し上げます。中平市長が東京出張ということもございまして、発言の機会をいただきましたので、県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」の策定に当たって、今回の対象となる学校に関しての提言をさせていただきます。</p> <p>まず、本市の地域づくりのビジョンでございますが、平成 27 年の 3 月に策定をしました「四万十市総合計画」の基本に、将来像「人が輝き 夢が生まれる 悠久と躍動のまち 四万十市」を目指して、地域創生総合戦略としての「四</p>

万十市まち・ひと・しごと創生総合戦略」や「四万十市産業振興計画」に沿って、関係各課および各関係機関と連携を図り、基本目標や基本方針をもって、具体的な施策を展開しております。

まちづくりの基本としましては、1点目に、四万十川の自然と土佐の小京都の歴史と文化を育むまち、四万十市の魅力を向上することによって、憩いと安らぎのあるまちづくりを進めております。

2点目に、市が広いですので、広い地域を「コンパクト・プラス・ネットワーク」するまちづくりということで、人口減少や少子高齢化に対応した育む住まうまちづくりを進めております。

3点目に、四万十ブランドを生かした活気あふれる賑わいのまちということで、地域経済の持続的発展と交流の複線によるまちづくりを進めております。

4点目に、南海トラフ地震や四万十川の水害に備える安全・安心なまち、防災環境や生活環境の改善による安全・安心なまちづくりを進めております。

5点目に、これらのまちづくりの営みを、市民と行政の協働によって進めていきたいと取り組んでいるところでございます。

中平市長のもと、国や高知県および各関係機関の力を借りながら、連携して特に力を入れて取組を進めているのは、産業育成と産業振興です。具体的には、農業、林業、水産業、商工業の振興によって、地産を強化し、外商の強化と観光の振興を図ることで、安定した雇用の創出と地域経済の成長・発展を果たすことを目指して施策を推進しております。

そのための人材の育成や確保、産業の担い手づくりは大切な課題であり、当然のことながら、そのための教育の充実、社会に近い存在の高等学校の充実は、ごく近い将来の人材の育成、確保という点で大変大切な鍵を握っており、大いなる期待を持っているところでございます。

四万十市教育委員会としましては、「オール四万十」で、「学び合い、高め合い、支え合う人の育成」というのを基本理念として、義務教育段階で、知育・徳育・体育のバランスの取れた人材の育成、特に、豊かな進路と将来に向けた確かな学力の定着と向上に力点を置いて、学校現場と協働しながら、教育行政を行っているところでございます。

義務教育段階で、しっかりとした学力を身に付け、幡多の中心でございしますので、それぞれの個性や能力、関心、意欲、キャリア形成に応じて、幡多地区および県外、国立・私立の高校に広く進学している実態がございします。その立場から、今日は発言をさせていただきたいと思っております。

それではまず、本市に立地します県立学校に対して、望む学校像や育ててほしい生徒像等について、学校ごとに述べさせていただきたいと思います。

まず、県立中村高校については、従前から、高知県下、中央部の高知追手前高校、東部の安芸高校と並んで、西部の進学拠点校として大きな期待があります。四万十市はもちろん、幡多地区の志のある生徒を集め、切磋琢磨しながら、単に大学入学者の数のみならず、入学する大学の質をアップするだけの高い学力とキャリア意識と望ましい人間性を身に付け、生徒や保護者が真に希望する大学に数多く進学する実績を上げ続けることが、地域の期待であり、また、高知県教育委員会としての期待であろうと思います。

併せて、県立中村中学校が誕生するに当たっては、単に制度的な中高一貫教育の導入と充実という期待のみならず、それまで国公立大学や難関私立大学、医学・薬学系統の学部等、高い学力が必要な大学に入学するためには、親元を

離れて、土佐中学校・高校や高知学芸中学校・高校等、高知市内の中高一貫の私立学校に進んでいた実態や歴史がございましたが、この県立中村中学校の誕生により、親元から安心して進学できる地元の中高一貫校において6年間の中で高い学力を身に付け、その希望を確実に実現することに期待がありました。

以上のことを踏まえて、国公立大学への入学、難関私立大学等への入学、医学系等の学部への進学等々、現実はいかがでしょうか。色々な評価があることではと思いますが、私どもの所にその期待に充分に応えるだけの進学実績、保護者、地域からの信頼度の高い評価は、残念ながら届いておりません。

近年の少子化を踏まえすと、入学定員を絞ることも一つの方策かと思いますが、中村高校としての3年間、県立中村中学校も含めた6年間を見通した西の進学拠点校としての、ゆるぎなく堅実なコース、カリキュラム編成等により、各界各層、官民を超えて、四万十市、幡多地区、高知県、日本を形づくるリーダーの育成を目指して、国公立大学および難関私立大学への入学者を、数の面でも質の面でも輩出できるようにしていただきたい。

さらには、旧帝国大学レベルの難関国立大学にも、毎年確実に入学できるだけの信頼度の高い学力形成、人間形成のできる進学拠点校としての、学校力の向上と飛躍を強くお願いしたい次第です。

次に、中村高校西土佐分校は、交通の便が悪く、また経済的にも高校進学が難しかった西土佐地区の生徒や保護者たちに大きな希望の光を与えました。近年は、交通の便も良くなり、真面目で素直な生徒たちは、それぞれに高い学力を獲得する者も多く出てきて、志を高く、幅広い選択肢のなかで西土佐分校以外の学校への進学者も増え、生徒数そのものの減少も相まって、ご承知のとおり、入学者数は減少傾向にあり、冒頭説明のあったとおり、存続の検討を要する学校になってまいりました。

しかしながら、最近の、「Rapport（ラポール）」というボランティアサークルによる自主的・主体的な地域貢献やカヌー部の全国レベルの活躍等により、分校の生徒たちの地域での存在感は価値あるものになり、何より、今なお親元から安心して通学できる高等学校としての存在感は、保護者、地域、そして私どもが認めるところでございます。厳しい環境にある子どもたちへの支援という基本方向からも、どうか何らかの形をもって、存続を継続していただけることを望むところです。

なお、本市としましては、貴重な西土佐分校の存続のために、学生寮的住居を提供したほか、毎年130万円の予算措置を講じて、生徒の部活動やサークル活動および学生寮の助成等の継続的な支援をしております。また、平成16年1月より、行政と地域住民で構成する「西土佐分校存続推進協議会」を立ち上げ、定期的に会合を開き、学校の現状と支援方策、今後の存続支援の在り方等について協議を続けておりますことを申し添えておきます。

次に、幡多農業高校ですが、私どもが学生時代だった40年ほど前に比べ、格段に学校の存在価値、生徒から見た魅力、地域からの評価が高まりました。私の知り得るところでは、熱心なOBや後援会組織もうまく巻き込み、平成10年ごろ以降、沖上校長時代から現在の宮川校長まで、歴々とした地道な学校改革と学校経営の改善を進めました。具体的には、「アグリパークはたのう」の改称や、学科の再編および科名の変更。少人数による実業高校ならではの実習を織り交ぜた行き届いた教育と生徒指導。体験学習や出前授業等を通じた、管内小・中学校との交流。「はたのう市場」の開催をはじめとする地域との交流

を積極的に進め、開かれた学校、地域とともに歩む実業高校としてのスタンスと活動が、より鮮明になりました。また、馬術部の全国レベルの活躍や、最近では、優れた指導者による陸上競技者の育成等、生徒にとっては、明るい未来、豊かな未来が開ける希望、多才な可能性を感じる魅力ある学校になりました。

四万十市および高知県がめざす産業育成、特に、農林業や園芸、人々の生活を豊かにする食品・製品づくり等、第一次産業から第三次産業を掛け合わせた産業の担い手を育てるべく、ぜひ今の流れを大切に、充実した教育活動と人材育成を展開してほしいと望みます。

四万十市以外に立地する県立高等学校に目を転じますと、本市から入学者数が比較的多い学校から言いますと、宿毛工業高校ですが、技術革新が進み、官民一体となって進む第四次産業革命や、「IoT (Internet of Things)」、「Society (ソサイエティー) 5.0」の世界を考えた時、たとえ高知の片田舎であっても、興味・関心に基づくたくましい志と優れた能力を持った技術者のたまご、生産者のたまご、磨けば光る純真な人材はたくさんいます。

ぜひ、これからの高知県や四万十市に、テクノロジーとイノベーションの進化と創造をもたらす意味でも、宿毛工業高校は大変重要な存在感を示し、その分野の人材育成を求められている学校だと認識をしております。時代も教育内容も見据えながら、定員数や科の編成およびカリキュラム改善を積極的に進めつつ、宿毛工業高校を、幡多工業高校と名称変更することも一考していただき、時代の先を読んだ幡多の核となる工業高校として、確固たる存在になってほしいと願っております。

次に、大方高校ですが、四万十市内の小中学生には、家庭的、養育的に恵まれない子ども、何らかの原因で不登校や適応障害を起こし、十分に義務教育を履修できていない生徒、学力や生活態度に課題のある生徒、そして最近では、発達障害等、特別に支援の必要な生徒が増加傾向にあります。

そんな現状のなか、大方高校は多部制高校として、本市の生徒にとっても、幡多地区および近隣の生徒にとっても、また保護者にとっても、大変ありがたい存在感のある学校になっております。大方高校の先生方のおかげで、我が子は救われた。大方高校のおかげであの子は立ち直ったという話は、保護者、地域、学校関係者等、今やいろんな方面から伺います。

また、昨今の「高校生津波サミット」での大方高校生徒の活躍は、地域に明るい希望と勇気を与えてくれました。校長先生はじめ、先生方のご苦勞も大変なことかと思いますが、ぜひ懐深く、温かい学校としての存在感を誇りに、存続と発展を願っております。

また、立地市から詳しい提言があるであります宿毛高校と清水高校については、幡多の地理的な条件とか生徒の分布状況、それから、通学の利便性からも、また、普通高校を自由に選択できるという観点からも、生徒数、入学者数等を勘案しながらも、ぜひ存続を望む立場でございます。

一方、これを機会に、あえて言わせていただくとすれば、高知県や四万十市が現在、強く推進する地産外商の「商」の部分、商業分野のコースが今の幡多地区には消えてしまった現実がございます。その点についても、これを機会にぜひ検討・議論の材料としていただければと望みます。

最後に、今回の再編および今後の県立学校振興にあたって望むこととしては、今回の機会を県全体の県立高等学校の歴史や存在価値を見つめ直し、高知県や各市町村、そして、日本が目指す社会の方向性に向かって、意図的、計画



	<p>的、かつ総合的に進むチャンスととらえ、あの地域の学校をどうするか、どの学校をどうすれば、より存在価値と役割、高知県および各市町村の振興や発展、将来の人材育成としての機能を果たせるのか、より広い視野、永い視野、より俯瞰的なレベルで議論を介して、再編計画の策定に反映していただきたいと切に願っております。</p> <p>各学校レベルとしましては、学校長はもちろんのこと、教職員全体で我が校の歴史と伝統、存在価値やミッションを、各関係機関および地域の方々との意見交換を交えながら、ぜひ、再検討、再確認、再探究されて、学校としてのブランド、学校組織やカリキュラムの在り方等を、高知県教育委員会事務局とともに考え、これを契機にさらに高等学校教育の充実につなげてほしいと願います。</p> <p>余談かもしれませんが、ご承知の方も多くいらっしゃいますが、尾崎知事のご両親は、土佐清水市と四万十市のご出身、岡崎高知市長、この前にいらっしゃる田村教育長は、宿毛市のご出身、幡多は昔から人材の宝庫というふうに言われております。東京大学の総長で文部大臣を務めた有馬朗人先生は、雑誌やインタビューのなかで、以前、これからの日本をリードするのは、都会育ちではなく、自然が豊かで人情豊かな田舎で育った子どもたちであると明言されておりました。</p> <p>少子化のなか、今回の再編計画の策定と実行を機会に、世界や社会、地域を見つめながら、確かな教育を地道に積み重ねることで、ぜひ、幡多から高知県から多才で優れた人材が輩出できる環境を共に作り上げていくことをお願いし、また、私ども自身も義務教育の充実等をはじめ、新たな決意をもって、提言を終わらせていただきたいと思います。</p>
田村教育長	<p>どうもありがとうございました。それぞれの高校についての具体的なご提言も含めて、大変詳しくご発言をいただきました。</p> <p>それでは、ご意見ご質問ございましたらお願いします。</p>
八田委員	<p>各学校について色々ご意見をいただき、ありがとうございます。</p> <p>まず、中村中高の一貫教育ができたことに、四万十市の皆さんが期待していたものが、なかなか実現していない。特に、医学部であるとか、難関大学に合格していない。かつて高知市内の私立に行っていた子どもたちが、中村中高に期待したんだけど、昔ほどは、こういう進路が実現していないという感じなんじゃないでしょうか。</p>
四万十市教育長	<p>少し誤解があるかもしれませんが。私も実は中村高校の出身ですが、昔は、今の進学実績から比べると、まだ低い状況でございましたので、昔と比べると、国公立大学の入学者数も、それから有名私立大学への入学者数も増えております。</p>
八田委員	<p>一番問題なのは、もし子どもたちがそういうところを希望しても、現状のカリキュラムであるとか、そういう問題でなかなかうまくいってないということであれば、こういう方向でこう変えていけばいいとか、何かもしヒントがあればと思ったんですけども。</p>

四万十市 教育長	<p>学校の教育課程そのものの中身については、私どもの立場からすると、知り得るところがない世界なので、何とも言えないわけですが、結果的に高知新聞とか今回資料として高等学校課の準備した資料から見た時に、例えば、高知追手前高校とか、高知西高校とか、高知小津高校と比較してどうなのかといったところについては、興味関心のあるところでございます。</p> <p>従って、県立中学校それから中村高校、入学した時の成績からして、そのほかの進学校と比べてどうかといったところについては、ぜひ精査、吟味していただいて、その中村高校の評価について検討していただいたらという立場で、具体的なことは申し上げられないと思います。</p>
八田委員	<p>分かりました。ありがとうございます。</p> <p>もう1点、西土佐分校は非常に厳しい状況にあって、地域のこれからの進学する数、想定される数がなかなか伸びる可能性がなくなってきている。単に、小規模校を運営するコストの問題よりも、子どもたちがやっぱり高校段階でたくさんほかの生徒と一緒にままれて育つという環境が実現できてないということが、高等学校としては少し問題があるなということがあって。何とかここにもう少し、子どもたちが集まってくる仕組みがつくれればいいと思うんですね。</p> <p>例えば、四万十市の市街地からも、分校に通うようなことがもし実現できれば変わってくると思うんですけど、何かこの辺り難しい問題なんですけど、ヒントをいただければと思います。</p>
四万十市 教育長	<p>やはり地理的な理由があると思います。交通の便とかです。例えば、宿毛工業高校とか宿毛高校、それから大方高校は、比較的通いやすい。最近では、窪川高校に通う生徒も出てきました。そういう面では、やはり交通の便がまだ十分に整備されてないので、中村市街地から西土佐分校に行くというのはなかなか難しく、西土佐分校に行った場合には、寮に入るとかいった形のことを今まで聞いております。</p> <p>あとは、西土佐中学校の生徒数が今、3年生 26 名、2年生 22 名、1年生 21 名ですが、今の小学生はほとんど 10 人台なんです。そういうところで言うと、もう地元の生徒の絶対数は減っていますので、今お話にあったようにカヌーであるとか自然を満喫しながら実習ができるとかいろんな魅力を発揮して、今 42 名中 13 名が西土佐以外の所からの高校生と伺っていますけども、そういった生徒を取り込んでいくといったところが成果につながるかなということは思っております。</p>
木村委員	<p>先ほどのお話のなかで西土佐分校の存続協議会でよろしいですか。どういった構成メンバーで、どういったことを進めておられるのか、もしお分かりでしたら、お教えいただけますでしょうか。</p>
四万十市 教育長	<p>西土佐分校の再編の推進協議会につきましては、一応学校の方から学校の現状、そして、どんな支援が必要かといったことについて説明や協議をしております。なお構成としましては、平成 16 年度、当初はまだ市村合併の前でしたので、旧西土佐村の村長も入りながら、現在では西土佐支所の支所長ですね、行政的にいいますと。それから市議会議員、教育委員、区長会、それから、小</p>

	<p>学校・中学校・保育所の校長、保育所長といった方々や地域の有識者、それに高校関係者というふうな構成になっております。</p> <p>なお、その話のなかでさっき話が出ていたように、近隣の市町村にPRをしていくということで、今年の場合は中平市長の方から愛媛県の松野町とか鬼北町、それから姉妹都市であります大阪府の枚方市の方に出向いて行って、生徒募集の要項を配ったり、PRをしたり、そういうような努力もしております。</p> <p>徳弘教育長さん、いわゆる四万十市から子どもさんが通える範囲の高等学校につきまして、いろんな状況をご説明いただきまして、ありがとうございます。</p> <p>今回、再編振興計画で市町村を周るなかで、本当に勉強不足だったんですけど、各市町村が県立学校を随分ご支援してくださっているということを知ったということでございます。西土佐分校におきましても、学生寮の補助とか学校支援的な金額とかも市から援助していただけるというお話も聞きました。</p> <p>現在、色々分析もされてましたけど、私、今日午後、中村高校へ訪問した時に、西土佐分校は、今3年生が22名ではないかと思えます。2年生が11名で、1年生が9名で、22名の生徒が、この春卒業をされると思えます。</p> <p>そこで一つは、入学した生徒がそのまま西土佐分校で3年間、中途退学もすることなく続けているのは、分校としての何か素晴らしさがあるのではないかという思いもしました。そういう点も、教育長さんもお考えのもと様々な支援をしていただいていると思えます。</p> <p>先ほど、県外へも広報用のDVDも配っているというお話も聞きましたけど、今後、西土佐分校がいわゆる分校定員の20名という数字も出してありますけれど、存続できる形に、四万十市としていただいている支援といえばどんなことがあると思えますか。やはり、学校が主体になって考えるべきだとは思いますが、その辺の教育長さんのお考えをお教えいただけたらと思えます。DVDを配布したり、魅力を語っているということはよく分かりますけど、少しその辺のお考えを教えいただきたいと思えます。</p>
<p>平田委員</p>	<p>私も去年8月から教育長になって、今回も色々と西土佐分校については、資料を寄せてもらって、私なりに見させてもらいましたが、やはり、のどかな西土佐地域の特性を生かした教育活動を行っています。それから、地域の敬老会であるとか、保育所のクリスマス会であるとか、小中学生の放課後学習支援とか、西土佐にある人々や機関と交流を持ちながら、ほのぼのとした活動を行っています。そういう面では、本当に憩いのある学校じゃなかろうかと思えます。そういったことをぜひ発信をしていきたいです。さっき大方高校の話もしましたけれども、安らぎ等のある地を求めている高校生もいるんじゃないかというところなんです。</p> <p>市長も西土佐出身でPRをしていただいています。いろんな場を通じて西土佐分校の存在や教育活動を提起し続けることが、われわれとしてできる支援かなということ、改めて感じさせてもらっています。それ以上にあれば、また、ご教授いただきながらというふうには考えています。</p>
<p>竹島委員</p>	<p>教育長、今日はありがとうございます。</p> <p>生徒の安全性という点で、今日は西土佐分校には学校訪問していないが、前</p>

	<p>に高知追手前高校吾北分校へ訪問した時に、バイクで通っている生徒さんが高知市内から1時間弱ぐらいかかって通っているというのを聞きました。今の寒い時期や雨の時期は、すごく大変だし危ないと感じました。今、この資料を見ますと、校長先生がよく分かってるかもしれませんが、寄宿舍は全員カヌーの選手じゃなかったでしょうかね。</p>
四万十市 教育長	<p>そうです。</p>
竹島委員	<p>全員じゃなかったら、バイクで通っている学生さんが6人ぐらいいるということですが、通学の距離はどれくらいのものなのでしょう。</p>
田村教育長	<p>それは校長さんをお願いします。</p>
中村高校 校長	<p>西土佐の地域内ですが、少し大宮の方へ入って行った西土佐須崎の方とか、愛媛県境の西ヶ方とかですね。</p>
竹島委員	<p>時間的にはどうですか。</p>
中村高校 校長	<p>多分10分か15分で着く距離です。昨年は中村からという生徒もいたんですが、もう卒業しましたので、今は10分か15分で着く所から全員来ています。</p>
竹島委員	<p>吾北分校のことをふと思いました、分かりました。学生を確保するという点で、バスを出すとか寄宿舍の人数を増やすなど、教育長として、何か県の方に言いたいことはございますか。</p>
四万十市 教育長	<p>すみません、今のところ、まだ実態を十分に把握してないところもございませぬ。ただ、できるだけ支援をしていくということについては、西土佐支所と一緒にやっていくという実態がありますので、声を聴きながら、できることは進めさせていただきたいし、また、県の方にも働きかけをしていきたいというふうに思っています。</p>
田村教育長	<p>そのほか、よろしいですか。主に、西土佐分校の話が中心でしたけれども、私は、西土佐分校は随分頑張っていると思います。最近、カヌーとかボランティアの話もありますけれども、学力面でも随分頑張ってもらってるんじゃないかなと思っています。そういう良さをいかに知ってもらうか、特に地元の人に知ってもらわなければならないのが、大きな課題かなと思っています。地元だけでは足りないということなので、もっとアピールするというようなことも要るかなという気もしております。特にないようでしたら、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。</p>

#### ウ 宿毛市

田村教育長	<p>それでは、続きまして、宿毛市の教育長さんの方からよろしくをお願いします。</p>
-------	---

宿毛市  
教育長

宿毛市の教育長の出口と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

私どもも今日は本来なら市長が出てきて、委員の皆さんに直接、まちづくり、それに絡めての高等学校の位置付けとか、そういったお話をさせていただきたかったんですけども、どうしても所要がございまして、今、上京をいたしております。私の方からは、高等学校の統合・再編ということに絡んでの地域の想いと言いますか、そういったものを若干述べさせていただけたらありがたいと思っておりますので、どうかよろしくお願ひいたします。

学校の統合・再編という問題は、高等学校に限らず、私ども義務教育を所管いたしております市町村の小中学校においても大きな課題でありまして、本当に悩ましい問題でもございます。事務局の方から説明が最初にございしましたが、生徒数の動向だけではないというお話もございましたけれども、ただ、委員さんのお話でございましたように、一定数の規模がないと、適正な規模で培うべき教育というのは、どうしても必要に求められてくるのではないかなと思ひます。

そういうことで、私たちも学校再編・統合を、地元あるいは保護者に説明するに当たっては、地域の想いとか、地域が寂れていくとか、いろんな想いがあることは、十分われわれも受け止めてはいるんですけども、最終的に教育委員会としては、子どもにとってより良い教育環境とは何かと考へた時に、やはり切磋琢磨できるような環境、あるいは様々な意見を受け止め、さらには、そういったなかで自分の意見をしっかりと相手にも表現をし、伝え、理解を求めていく。そういう努力ができる環境というのが必要だろうというふうに考へております。

これは、「高知県教育振興基本計画」の大きな柱でもあります。いわゆる厳しい環境にある子どもたちというものも、現実、どこの市町村でもそうだろうと思ひます。例えば、本当に付帯の話で申し上げます。本人が学習意欲もあり、一定の資質もある。でも、そうかといって宿毛から全員が学芸であるとか土佐であるとか、あるいは土佐塾であるとか、そういう学校に行けるわけでもありません。本当にそういう意識は高くても、どうしても厳しい状況にある方々が大多数であると思ひています。

従って、学校統合・再編に当たっては、県の教育委員会、委員の皆さんにも、ぜひともその辺りをご理解いただきたいです。やはり、子どもたちが地域において安心して教育を受ける環境を私ども考へていく必要があるのではないかなと常に思ひています。

そういった意味からすると、今、高校に関していいますと、宿毛市で住む私どもの方には、宿毛高校と宿毛工業高校がございまして。宿毛高校もそうですけれども、定員も削減するというような状況です。当然、入学者数が減ってきている部分が背景としての取扱、であろうとは思ひますけども、現実、入学・生徒数も減ってきています。

その要因について、われわれも色々、実は考へております。地域の皆さんの声も色々聞きます。先ほど、それぞれの皆さんの方からお話もございましたけれども、例えば、県立の中高一貫教育の部分ですけれども、当然、宿毛からも多く流れて行ってます。中学校段階から県立中学校を希望する子どもたちが結構います。もちろん、全員が行けるわけではございせんけれども、そういう状況がございまして。

もう1点ございまして。これは市民の多くの声を聞くんですけども、宿毛高校

の総合学科の意味合いといいますか、メリットといいますか、そういったものが十分市民に浸透していないと思います。逆に言えば、少し厳しい言い方かもしれませんが、総合学科になったがために、宿毛高校のレベルが落ちたのではないかという厳しいご意見もよく色々いただきます。

総合学科は総合学科の目的があって、普通科では学べない、いわゆる主体的に自分が選択をし、自分がキャリアを伸ばしていく。あるいは自分のビジョンに向かっていくといういろんなメリットも当然あるわけです。現実問題として宿毛高校を希望する生徒が減っているという部分は、どうしてもやはり、その辺りのギャップがあるのではないかと思います。

進学するのであれば、近くでは県立中村中学校に行き、中村高校へ行くべきだ。家庭的にゆとりのある方のところは、高知の方へ出かけるというような状況が現実問題として多く聞かれております。

ですから、実は宿毛高校もそうなんですけども、先ほどご紹介いただきました宿毛工業高校も、非常に全国でもすばらしい技術を発揮していただき、優秀な人材を輩出していただいております。そういうなかで、皆さんご承知かもしれませんが、宿毛市はまさに明治期に中央で活躍された人材というのを多く輩出しております。

そのなかで、特に最近、私どもと関わりのあるのが、早稲田大学を創設した小野梓さんであるとか、あるいは、グローバル企業といわれております小松製作所の創始者である竹内明太郎さんであるとか、そういった方々とのつながりです。毎年3月に小中学生の作文発表の時に、早稲田大学の総長であったりとか、コマツの社長であったりとかに来ていただいて、作文表彰をしていただいております。そういう取組が毎年なされております。もう10数年続いております。そういうなかで、ぜひとも宿毛高校から早稲田大学へのラインがつかれないのかというお話をよくいただきます。この資料にもございますけれども、なかなか今の状態で有名私立大学に宿毛高校から受験をして合格というのは厳しい状況もございます。

ですから、われわれとしてはぜひとも最初に申し上げましたように、地域で安心して教育を受けられる環境をつくっていくということは、本当に重要だとは思っております。一方でやはり、その受け皿となる高校でどういうことを目指していくのか。やはり進学ということになれば、保護者から見ると、どうしても中村高校というのは選択肢に入ってまいります。

そういったもので、この学校再編・統合に絡めて、再編そのものも、もちろん重要なことだとは思いますが、総合学科という学校の在り様というものも重要であると思います。

もう既に10数年経っております。当然、県教委としての総合学科なり、あるいは中高一貫教育なりを検証されてきていると思います。良いところ悪いところ、悪いところは改善し、良いところはさらに伸ばすということをしてきていると思います。今回の方針のなかでも、中高一貫教育は今後も続けていくということですから、当然検証されているとは思いますが、例えば、改めて宿毛高校における総合学科の意義であるとか、逆に思い切って、総合学科そのものを見直すといったことも含めて、この再編に絡めてご検討いただき、ご議論をいただけたら、大変ありがたいと思っております。

現実、先ほど申し上げましたコマツなんかは、宿毛工業高校から毎年多くの生徒を雇用していただいております。宿毛工業高校から行った生徒は、本当に

	<p>真面目で優秀で意欲があると評価していただいております。将来の幹部候補として、ぜひとも育てていきたいということです。そういったつながりもあって、当時の工業高校の校長先生は、非常に前向きに関わっていただきました。そういう関係もあって、コマツからは授業の研究用の機器も寄贈していただいたり、色々つながりを深めていただいております。</p> <p>それと同時に、幡多地域、西南地域全体の雇用の場でもございます高知西南中核工業団地というのがございます。これも現在は、850名ほど就労しております。その企業さん方も、実は本年の1月4日の新年の御礼会の時にも工場長さんや会長さんからもぜひとも高校へ市の方からも働きかけをしていただきたいとおっしゃってございました。やはり地元で技術力もあり、すばらしい企業もありますので、ぜひとも都会ばかりではなしに、地元の企業もPRもして、自分たちも積極的にPRもしていきたいと思っております。宿毛高校あるいは宿毛工業高校の優秀な人材をぜひとも地元にも残していただきたいです。</p> <p>もちろん先ほど言いましたように、コマツのような企業にもどんどん雇用をしていただきたいです。黒潮町の大西町長さんもおっしゃいましたけれども、都会に出ていても、ふるさとを想う気持ちというのは、皆さん忘れないだろうと思っております。そういった人材を育てていく必要もあるだろうと思っております。</p> <p>そういったことから、この宿毛高校あるいは宿毛工業高校が地域に果たしている役割というのは非常に大きいです。ぜひとも、若い柔軟な発想と行動力、そういったものはいろんなイベントでの協力だけではなしに、自然体のまちづくりに絡めても必要なものだというふうに、私は信じています。そういった観点からも色々再編についてご検討をいただければありがたいと思っております。以上で終わらせていただきます。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございます。地元で進学を希望する生徒には、それが保障できるような宿毛高校であってほしいというご意見ですとか、それに関連して、早稲田大学あるいは小松製作所などとのつながりを生かした取組もぜひもっとやってほしいというご意見ではなかったかなと思っております。</p> <p>ご意見ご質問がございましたらお願いします。</p>
八田委員	<p>どうもありがとうございます。今、幡多地域の全体の定員が840あり、その中で、今日の資料にもありますが、実質中学校から上がってくるのは700人台で、これから100人から200人減ってきます。非常に厳しい状況にあります。定員を埋められる学校が今後少なくなってしまうのは現実で、何らかの形で再編ということは考えざるを得ないですね。全体を俯瞰した時に、最初、黒潮町長さんがおっしゃったかな。幡多地域は比較的バランスよく高校が配置されている。それで、土佐くろしお鉄道が比較的便利なので、宿毛と中村は意外と近いかなという感じはします。</p> <p>そういう意味で、土佐くろしお鉄道で宿毛と宿毛工業、それから、中村、幡多農、大方がつながっていると考えた時に、やはり宿毛高校の位置付けは確かに難しいと思われました。宿毛高校の総合学科は1つの在り方かと考えるのですが、確かに普通科の時の方がレベルが高かったと思っております。</p>
宿毛市教育長	<p>そういうわけではなく、そういう声があるとお聞きしています。</p>

八田委員	<p>その辺りはどういう位置付けにしたら、宿毛高校がこれから生徒を集められると思いますか。また、最初に申し上げたように、とにかく圧倒的に定員が多すぎるので、根本的に難しいところはあるんですけども、何か宿毛高校の在り方について、一言いただければと思います。</p>
宿毛市教育長	<p>ありがとうございます。お話がありましたように、この幡多地域全体、高知県全体もそうですし、日本全体の人口も減ってきています。当然、子どもたちの数も減ってくるというような流れのなかで、この幡多地域だけが例外ということは当然あり得ません。絶対的に減ってくる。そういうなかで、今の状況これだけの高校の数でいいのかという議論は当然あろうかと思えます。従って、皆さんのお話のなかでもありましたけども、それぞれの高校が特色を持たせていく必要があるだろうと思えます。大方高校は大方高校、中村高校は中村高校といったように。</p> <p>私も申し上げましたけども、今おっしゃっていただいたように、鉄道を利用すれば、そんなに時間的な距離ではない。もちろん、鉄道は月々の定期代だけでも何万というような金額になりますので、保護者の負担は非常に大きい部分もあるでしょう。一方で、高等学校は義務教育とは違いますので。ですから、一定そういったことについても通学範囲であろうと思えます。宿毛高校と宿毛工業高校を再編・統合という形になるのかどうかは分かりませんが。そういう形になるのか。あるいは、宿毛高校の今の総合学科をさらに充実していくのか。</p> <p>なかなか今難しいとは思いますが、例えば、中学校段階で自分の将来のビジョンをしっかりと持って、宿毛高校に来て、自分が主体的に自分の夢にかなう科目を選択して学んで、いわゆる巣立って行って、社会で活躍されるというのは、なかなか現実的に難しいと思えます。私自身も本当に恥ずかしい話ですけども、自分が将来的にこうしたいというある程度の方向性、光が見えてきたなというのは大学の時でした。高校時代も、まだ自分が将来何をやりたいんだというの、しっかりと見据えることができていなかったです。中学校時代にしっかりとそういったものが確立できて、高校を選んでいく形ができれば、望ましいとは思いますが、今言ったように、なかなか難しい部分もあるんじゃないかなと思えます。保護者としても、高校あるいは大学までそばに置いて、そこで自分の将来を見据えていく必要もあるのではないかなというお考えの方が今は多いのではないかなと思えます。</p> <p>実は、平成 29 年度の宿毛市・大月町・三原村の昨年 3 月に卒業した中学生に対して、宿毛高校に入学されたのが 39.2%、4 割に減っているという状況が地元からございました。もちろん、宿毛工業高校にも入学されていますが。そういったなかで、県の教育委員会の方にぜひともご支援をいただきたいのが、地域の方々に総合学科を今後も進めていくのであれば、総合学科の意義とかについて、一緒になって考えていっていただきたい。当然、私どもも小学校、中学校も続いて、将来を見据えていく。そういう流れをつくっていく必要があると思っております。</p> <p>宿毛高校をどういう形にしたらいいのかというのは、本当に悩ましい想いがありますけども、一方で委員さんがおっしゃいますように、幡多地域の高校をすべて普通科にしたらいいのかという話ではないだろうというふうに思います。</p>



中橋委員	<p>今の話の続きのような形になりますけれども、宿毛高校の総合学科というものと地域が期待することが多分今、合っていないんじゃないかなと聴いていて思います。総合学科というものになったことで、地域から高校に希望する子どもが減ったのか。それとも、入学したんだけど地域が期待するような子どもに育っていないのか。その辺りは両方どっちかというわけではないと思うんですけれども、よりどちらに問題があると考えていますでしょうか。</p>
宿毛市教育長	<p>非常に難しいですね。先ほどお話を少しさせていただいたんですが、子どもたちはとにかく高校に入学する。宿毛高校に入って、いざ自分が選択をしていく過程で、どうしても安易に選択をしていく。結果的にそれが合わないということがかなりあるのではないかと思います。もちろん必須科目とか当然あったうえでですけども、その選択する部分について、本当に自分が目指すべきものを見据えて、選ばれているのかどうかだと思います。</p> <p>子どもたちの場合はどうしても楽だからその科目を選択しているのではないかと。保護者の方からそういった声も聞かれます。これはもう生徒本人が選ぶことですから。当然、とやかく言えることではないんですが。そこの辺りをもう一回保護者や中学生段階から、しっかりと総合学科の在り様や意義を浸透させていく必要があるのではないかと考えています。ぜひ取り組んでいただきたいなと思います。</p>
平田委員	<p>黒潮町の町長さんもお話ありがとうございましたけど、やはり、ふるさとを愛しということで、愛すべきものが、山・川・海であったり、産物、生産物であったり、そこで育った人物であったり、様々あると思います。その切り口をどこにするかっていうのは別ですけど、本県には各市町村を見ましても、たくさんの地域に誇れるものがあると思うんですね。</p> <p>早稲田大学をつくった小野梓さんとか、小松製作所の創始者である竹内明太郎さんのお話を聴いておまして、竹内綱という方もおいでますけど、この竹内父子はいろんな面でよく知っております。このような宿毛市が誇れる方々を、小中高の子どもさんたちに伝えていっている。</p> <p>平成25年2月頃だと思うのですが、「あずさ会」という会があるので、出席しないかという話があり、寄らせていただきました。その時に早稲田大学の総長さんも来ており、竹内家子孫の、TBSアナウンサーの竹内明(めい)さんも来ていただいて、講演を聴かせてもらいました。</p> <p>そういう教育を通して、ふるさとに誇れる子どもを、まだ数多く宿毛市にはたくさんいると思います。自分も将来あのような人物像を描いて、なりたいという子どもを多く育てていただきたいと思います。そういう方向で取り組んでいただいているお話も聴きまして、大変うれしく思います。また、心強く思いました。ぜひ、お願いしたいと思いました。</p>
宿毛市教育長	<p>ありがとうございました。私ども小学校の段階において、『すくもの21人』という副読本を市の教育委員会の方で作らして、小野梓はもちろん、竹内明太郎、竹内綱、それから吉田茂、そういった郷土の宿毛の人物を副読本としてまとめています。子どもたちに宿毛は片田舎だけでも、明治期に日本を動かした有為な人材が多く出ているんだと教えています。それについて学び、それか</p>

	<p>ら、先ほど言いました「あずさ会」が主催で、梓と書いて「梓立祭（しりつさい）」という折に、子どもたちに宿毛の人物について学んだことを発表していただいております。</p> <p>早稲田大学、小松製作所、それからもう一人、宿毛の出身の方で、東京の神田神保町で富山房という出版社、書店を運営されている坂本様も毎年帰って来ていただいております。この書店も小野梓さんがもともとつくった会社なんですけども、その後を継いで現在に至っています。</p> <p>先ほど、最初の大西町長さんがおっしゃいましたけども、坂本さんなんかは、ご本人はもう東京で生まれた方ですけども、自分のお父様、お爺様が宿毛出身ということで、未だに宿毛に対して、そういう思い、熱い思いを持っていただいております。</p> <p>何とか宿毛の子どもたちのためにということで、例えば、宿毛小学校とお茶の水女子大学との連携があります。実は、一昨日もお茶の水女子大学の方から来ていただいて、災害発生後の科学の授業はどうあるべきかということを研究していただいております。様々な形でそういうご支援をいただいております。ですから、将来的に宿毛を離れて行っても、しっかりとふるさとを思いやる、そういう人材を育てていきたいというふうに考えております。ありがとうございます。</p>
竹島委員	<p>最初の方高校は、防災という点でPRしてますよね。中村高校も昨年、野球で盛り上がりましたよね。宿毛市としては、何か県内の皆さんにPRするものを考えていらっしゃいますか。</p>
宿毛市教育長	<p>そうですね、皆さんもご承知かもしれませんが。宿毛工業高校の生徒が全国の技術コンテストですばらしい技能を発揮していただいたということがあります。特に今、例えば宿毛高校、宿毛工業高校で大々的にPRできるというものは、今すぐにはお答えしないんですけども。ただ、先ほど言いましたように、小松製作所であるとか多くの企業のトップからも期待もいただいております。それはやはり、こういう地方のいい環境で育った子どもであるがゆえに、素直で真面目で、何事にも前向きで、真剣に取り組める。それでいて、技術力もあるということであろうと思っております。ぜひともわれわれとしても、そこをPRもしていきたいと思っておりますし、支援もしてまいりたいと思っております。</p>
竹島委員	<p>本当に、教育長さんの地域愛をすごく感じました。何か一つPRできるものがあれば、もっともっと盛り上がると思いますので、よろしく願います。</p>
田村教育長	<p>そのほか、よろしいでしょうか。</p>
各委員	<p>はい。</p>

## エ 土佐清水市

田村教育長	<p>それでは、最後になりましたけれども、土佐清水市の泥谷市長さんの方からよろしく願いたいと思っております。</p>
-------	--

土佐清水市  
市長

どうも、大変いつもお世話になります。土佐清水市長の泥谷です。実は月曜日から、宿毛市長、四万十市長と3名で要望活動に行っておりまして、今日は一足先に失礼して、午後一の便で帰って来ました。ぜひこの清水高校に対する皆様のご理解をいただきたいと思って来ました。19日の金曜日に「土佐清水市総合教育会議」を開いて、清水高校の在り方については、一定議論はしてきましたが、なにぶん整理をしてないものですから、大変お聞き苦しい点があるとは思いますが、よろしく願いいたします。

私、市長になって5年目に入りました。まちづくりの観点からいいますと、5つの柱を掲げております。

まず1点目は、「子どもは宝」。子育て・教育環境の充実、それを1番に挙げております。そして、「若者は希望」。基幹産業の一次産業である農業、漁業、そして観光業の復興、これを2番目に挙げております。そして、3点目としては、「お年寄り誇り」。お年寄りが住み慣れたふるさとで誇りを持っていつまでも元気で暮らしていける環境づくり。そして、4点目は、市民の「命を守る」。これは南海トラフの防災対策ということで掲げております。そして、「絆は力」。やはり、家庭、学校、そして地域が連携してまちづくりに取り組む。この5点をまちづくりの基本として掲げておるところであります。

また、高台移転の状況を少し説明させていただきます。この5年間で「緊急防災特別措置法」というのが、平成25年～28年までの4年間の時限立法で法律が制定されまして、特にこの4年間に集中的に高台に公共施設を移転しております。具体的には、消防庁舎、そして清水中学校です。清水中学校は5校あった中学校を1校にまとめまして、平成25年度から高台でスタートしております。それから、小学校も昨年度と今年度、2年計画で建て替えました。まもなく二期工事が終わって、この4月からは新しい校舎で学べるというところでもあります。また、市街地にあった3つの保育園も統合いたしまして、中学校の少し上の所に新築をいたしております。また、ほかの保育園もすべて高台に今年度、来年度に高台に移転するという段取りになっております。

また、防災拠点施設といたしまして、中央公民館、それから、旧町単位での防災拠点施設の整備。さらには、庁舎の耐震化、そして学校給食も、今年の6月から高台に新築をいたしまして、学校給食がスタートいたします。県の総合庁舎も、今、建て替えを高台にしておりますし、国の機関である海上保安署も、高台に移転をする予定になっております。3つの金融機関も高台に移転する計画を進めておりまして、もう既に四国銀行は高台に移転をしております。

これも三次都市計画といたしまして、市街地の高台にこの造成をいたしました。その土地がありましたものですから、比較的速やかに、スムーズに高台移転をすることができました。

そして、いよいよ清水高校ということでもあります。前期の振興計画の中には、高台に移転を検討するという文言が入っておりますので、後期の振興計画には、可及的速やかにこれが実現をできるように、ご協力のほどお願いしたいと思います。

土佐清水市の「教育振興計画」というのがあります。この基本理念が「ふるさとを愛し ジョン万スピリットを持った 心豊かな人づくり」です。目指す人間像として、清水、すなわち家族、家庭、仲間、ふるさとを愛し、社会に貢献できる人間。豊かな感性と想像力を備え、共に支え合う魅力ある人間。広く世

界に向け、大きな夢や志を持って未来を切り開く人間。これを目指す人間像として、取組をしておるところであります。ジョン万スピリットというのは、チャレンジ精神です。何事にもチャレンジをすることです。そして大事な場合でも自分で決断し、結果を他人のせいにはしない。そして最後に、決して諦めない。これがジョン万スピリットであります。このジョン万スピリットを持った心豊かな人づくりということで、取り組んでいるところであります。

さて、清水高校の状況でございます。ご承知のとおり、少子高齢化も相まって大変厳しい状況であります。私たちの時代では6クラスありました。その中でも、魚の町土佐清水市を象徴する漁業科というのがありまして、本当にこれまで、すばらしい人を世の中に送り出しているところであります。この漁業科には大月町や宿毛市、それから、旧佐賀町の方からも進学するという特色のある学科でありましたが、残念なことに、これも生徒の減少ということで、平成10年度に閉科になっております。

そのようななかで、先ほど言いましたように、平成25年度に5つの学校を統合いたしました。平成25年度に清水中学校が荒れていて、私も毎日、校門に立って挨拶の運動や色々な取組もしました。その結果、この平成25年度から、次の年に清水高校の進学率が40%を切るという状況になりまして、今は若干持ち直しているものの、4割台で推移をしているというのが現状であります。

ほかの町市からのお話もありましたが、本当に実態を見れば、やはり、中村高校、それから宿毛工業高校、幡多農業高校などの近隣の学校をはじめ、市内の優秀な生徒は家庭も比較的裕福で、力のある家庭においては高知市内の有名な私立高校や公立高校に進学するという状況であります。この清水高校にもっと進学していただきたいということで、平成26年度から連携型の中高一貫教育を始めました。

具体的には、清水高校から清水中学校へ、国語・英語・数学の先生に来ていただいています。また、清水中学校からは清水高校へ、美術の先生を派遣して、お互い連携のもと、教材の作成をしたり、キャリア教育を推進したりしています。それから、土佐清水市では英語検定の受験料の半額を助成するという制度もやっております。

というのは、昭和63年にジョン万次郎の縁でアメリカのフェアヘーブン、それからニューベッドフォード、この2つの都市と姉妹都市の連携をいたしました。本年度、ちょうど盟約を結んで30年の節目の年を迎えたところであります。これまで清水高校からは短期留学制度ということで、「姉妹都市友好協会」というのがありまして、そこから生徒に助成をしています。これまで、189名の生徒が留学の経験をしております。参加者には、現在外国語の教師、それから、外国語を生かした道を進んでいるケースも見受けられますので、一定効果があったと思っております。また、中学校でも今年度、NHKの厚生文化事業団の「全国防災キャラバン」というのが土佐清水市で行われまして、「防災小説」の作成、講演会、パネルディスカッションといった取組も活発に行われております。さらに中高で合同の弁論大会を行ったり、「土佐清水市中高生みらい議会」を開催したりしています。これは本会議場で中学生・高校生が執行部を相手に本番さながらの議会をやるという試みです。今年で3年目を迎えております。そのような取組も行っております。

また、定時制の問題でありますが、定時制は非常に生徒が少ないというご指

	<p>摘も受けておりますし、またそのとおりでございます。ただ、中学生の時に不登校になったり、それから、いろんな事情で全日制に通えない、通うことができない、精神的にも通うことができない子どもの受け皿として定時制というのは、土佐清水市にはなくてはならない存在になっております。</p> <p>また、中学校ではいろんな環境になじめなかった生徒も、この定時制で学んで、市議会議員にもなった生徒が最近ではおりますので、一定この定時制の役割というのは土佐清水市にとって大変大きな部分を占めていると思っております。色々、話したいことがあるんですが、また皆さんからの質問を受けながら、私や教育長、それから清水高校の校長先生も来ておりますので、ご質問をしていただきながら進めていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。以上です。</p>
田村教育長	どうもありがとうございました。ご意見ご質問があったらお願いします。
八田委員	今、40%を少し超えるぐらいの進学率ということですが、そのほかの進学される方の行き先のおおよその割合、それから、幡多地域に行く場合には、通学をされるのでしょうか。その辺りの事情を教えてくださいませんか。
土佐清水市市長	細かい数字は、後でまた教育長の方から報告させていただきますが、基本的には、幡多圏内であれば通学ということになります。
八田委員	公共のバスで通学をしているんですね。
土佐清水市市長	あとは工業、農業、それから商業といった専門職系の進学率というのが25～28%ぐらいの割合です。普通科でも3割ぐらいは他校に抜けるという状況になっております。学校の割合については、教育長の方からご説明をさせていただきます。
土佐清水市教育長	<p>今、市長の方からもありましたが、大体、普通科を希望する子どもたちは70%ぐらいです。多少、年によって前後するんですけど、70%ぐらいの子どもたちは普通科を希望します。それで、25%ぐらいが工業、商業、農業を希望します。専科になっていくような学校を選んでいきます。</p> <p>その70%の中で、清水高校に残ってくれる子どもたち、そのまま清水で教育を受けるといふ子どもたちが少し前までは50%ぐらいです。私、教員出身なんですが、私どもが教諭としてやっていた時には、60%とか65%の推移で、清水高校に入学していました。それが年々落ちてきて、ここ10年ぐらい前になると50%台です。先ほどの市長の説明の中にもありましたが、昨今は、平均を取ってみると、43%ぐらいまでに落ちてきている状況です。</p>
八田委員	以前はかなりの割合で清水高校に行っていた普通科希望の子が、清水高校に行かない選択をするようになったのは、どういう背景がありますか。やはり清水高校では、自分の進路実現ができない、そういうことがあるんですか。
土佐清水市教育長	清水高校に行かなくなったという表現よりも、以前から外に出て行った子どもたちの数がそのまま残っているといた方がよいと思います。絶対数が減っ

	<p>てきておるわけですので、子どもが現役のころは、当時、市内で7校あったわけですが、清水中学校だけで1学年で240名ぐらいおりました。そうすると、市内あとの6校を足すと、おそらく400人ぐらいの数の子どもたちがいたはずなんですけど、その400人が60%ぐらいは清水高等学校に行っていました。</p> <p>しかし、当時から外に出る子どもたちも、30%ぐらいで推移していました。その30%が、人数が減ってきていますので、もちろん減ってはきていますが、それほど減らずに、まだそのまま外の高知市内の私立高校であったり、県立高校であったり、また近隣の四万十市さん、あるいは宿毛市さんの方の学校にも引き続き通っている。そういう表現の方が正確かなと私としては分析しております。</p>
木村委員	<p>連携型の中高一貫教育で、目に見えている成果といいますか、こういう形で本当に良くなっているというところをお教えいただきたい。また、市長さんが相当荒れていたという中学校がどういう経緯で落ち着いてきたのか。それは統合によるのかもしれませんが、何かありましたらお教えいただきたいと思えます。</p>
土佐清水市教育長	<p>1点目、連携型の中高一貫教育を、平成26年度からさせていただいておりますが、子どもたちがいろんな場で交流ができてきたわけです。中学生は高校生に学び、また、高校生も中学生から学ぶところがある。弁論大会や、いろんな行事が入ってきて、もちろん先ほど言いました議会も、本当の議場で本当の執行部でほぼ本当というような形で、一緒に体験してずっとやっています。それで、中学生も高校生も発表する力、内容、態度、言葉遣いが洗練されてきたと言えます。弁論大会の後なんかも、非常に良かったねというような評判が聞こえてきております。そんなところで、共に伸びているのかなという感じを受けています。</p> <p>統合の荒れの部分でございます。本当に頭を悩ました。私は、実は教育長になったのは、平成25年の7月からでございます。もうその時には進行しておりました。平成25年の4月から開校で、その校舎を使っていたわけですが、4カ月の間にもう考えられないような状態になりました。学級崩壊はもとより、器物破損もありますし、あらゆることがありました。</p> <p>とにかく教育委員会としても、また市長も携わってくれたんですけど、人間関係が少し壊れているというところで、挨拶運動から地道にこうと考えました。我々が外から直接できることは、子どもたちに触れ合って、挨拶をしてということでした。全員の教育委員さんにもお願いして、朝立つというところから始めました。また、現場としては、学校長とともに、やはり自尊心が子どもたちに不足しておったというような分析から、その心の内面から子どもたちとつながりを持とうとしました。そして、もう一つ、生徒会活動がそういう状況のなかで停滞してしまっていて、自治がないというような状況もありましたので、生徒会活動を充実させました。他に、授業改善です。授業をやはり徹底して改善しました。子どもたちが1日を過ごすなかで、一番多いのは授業なんです。6時間もいるわけですから。</p> <p>今言ったようなことの取組を、パイプでつないで地道にやってきました。年々といいますか、改善して、おかげ様で、本当にわれわれが予想するよりも早い状況のなかでの回復力を見せていただきました。もう今となっては、学校</p>

	<p>なんか行っても、整然と子どもたちが並んで、私語なんかっていうのは無いですね。呼吸するのもはばかりのような静けさといいますか。静かにする時には静かに、聞く時には聞く、発表する時には堂々と発表するという学校に変貌してくれてっております。</p> <p>音楽祭の時だったと思います。私も採点を頼まれて現場にいたんですけど、歌を聞いて感動をしておりましたが、先輩といいますか、私の恩師にもなるわけですが、そういう方々も来ていただいてました。わざわざ肩をたたいてくださって、感動したというような言葉もかけていただきました。</p> <p>本当にどなたの目から見ても、子どもたちの在るべき姿に戻ってくれたのかなという感想もいただきました。答えになったかどうか分かりませんが、そのようなところでございます。</p>
中橋委員	<p>今のお話ですが、われわれ教育委員会や県教委で、平成 25 年に清水中学校を見させていただいて、本当にたいへんな状況の時でした。</p>
土佐清水市教育長	<p>4 月ですか。</p>
中橋委員	<p>7 月です。ちょうど荒れていた時でした。今の話を聴かせていただいて感慨深いんですけども、ちょうどあの時に中学校にいた子どもたちが、今、高校 2 年生や 3 年生になっているんですか。</p>
土佐清水市市長	<p>いや、来年、成人式ですね。</p>
中橋委員	<p>来年成人式ですか。もう高校は卒業しているんですね。その数年前、清水高校に進学した子どもも、4 割とはいえ、多くが清水高校に進学したと思いますが、高校の時には、そこそそ落ち着いていたということでしょうか。</p>
土佐清水市教育長	<p>落ち着いていましたね。それは、益永校長がいますので、直接聞いていただいたらと思います。</p>
土佐清水市市長	<p>今考えたら、5 年前の出来事が夢を見よったような感じですね。</p>
中橋委員	<p>高校自体が荒れるということはなかったですか。</p>
土佐清水市教育長	<p>それはないですね。当時、新任の教育長で、都市教育長会というのがありました。そのなかで、次の教育長会は、弘田君が発表をしてくれと言われました。何を発表するのかというと、これから統合を控えている市町村が多いから、いかにお前が失敗してきたかということを発表してくれと言われまして、もう泣きながら話しました。</p> <p>それで、その時に言われたのが、やっぱり 5 年はかかるよと。定説といいますか、何の根拠でそんな話になっているか分かりませんが、やはり 5 年はかかるんだろうと言われました。それは待てんということで、もう市も挙げ</p>

田村教育長	<p>て、市長も挙げて、施策をやって、また県教委にも協力をいただいて、平成 27 年ぐらいからはもう回復してきた状況です。</p> <p>何かお話しいただけますか。</p>
清水高校 校長	<p>私は平成 26 年度に清水高校の校長として赴任しました。その時に、最初の段階で言われたのが、平成 26 年度から連携型の中高一貫をやるということでした。その目的は、キャリア教育の推進とかもあるんですけど、まずは一緒になって中学校を立て直そうと。その中学生は当然高校に入ってくる。当然、高校のためにということで、中高連携に臨みました。</p> <p>とにかくいろんなことを中高でやろうと考えました。授業はもちろんですけど、いろいろな取組をしました。ただ、影響は無かったわけではありません。例えば、高校では学力診断テストというのがありますが、平成 25 年度までの診断テストの結果に比べて、平成 26 年度入ってきた 1 年生の診断テストの結果を見ると、上位の 3 分の 1 がすっぽり抜けた状態で生徒が入ってきていました。噂ですけど、清水中学校から清水高校に進学するというので、同じ生徒と同じ環境で勉強したくないという生徒さんがいたという話です。その生徒さんが抜けて行ったという噂がありました。非常に残念なことでした。</p> <p>だけど、私たち清水高校は、入学してきた 40 数名の生徒にきちんと教育を受けさせないといけないということでやりました。正直言って、細かな生徒指導はありましたが、大きなものはなく、校長が言うのも変ですけど、そういったところでのストレスというものはほとんどなかったです。生徒は素直に卒業をして、去年の春、その当時の 3 年生が全員無事に進路を決めて卒業していきました。今の高校 3 年生・2 年生・1 年生というのは、実はその荒れた年の中 2・中 1、次の年に入ってきた小学 6 年生ということです。実は、この生徒たちの学力がちょっと低いなという心配はありますが、近年中学校からの報告ですと、非常に水準も戻ってきたということです。来年度以降の入学者には、本当に期待するところがあります。以上です。</p>
平田委員	<p>市長さんの清水高校への色々な支援のお話を聴かせていただきまして、ありがとうございます。だんだんにお話もございましたけど、清水高校として、活力湧く学校づくりは、どうしても一定の生徒数確保だと思いますね。簡単なことではないことは重々分かりますけど、清水市から清水高校への進学者が約 43%。その数字を上げるためには、清水高校として、地域と一緒に、現在中高連携もやっている。市としては、大学へ奨学金も出していただいて。帰ってくればという子どもたちの特典も考えております。清水市の子どもたちが清水高校へ進学するという率を上げないと、清水高校の生徒減少は、これからも続いていくと思いますね。</p> <p>高等学校として、市の幹部の市長さんはじめ教育長さんから見て、清水高校がどういう学校になれば、その率が上がるのか、日ごろお考えのことがあれば、お教えいただきたいと思います。</p>
土佐清水市 市長	<p>かつての漁業科があった時代もありましたが、やはり、特色ある学校づくりが大切なのではないでしょうか。ジョン万次郎ゆかりの地で、アメリカとの交流もありますので、できれば、そういう国際交流に特化したようなコースとな</p>



土佐清水市 教育長	<p>った特色ある学校づくり、これがやっぱり大切ではないかというふうに考えております。</p> <p>それと併せて、今もやっけてくださっているんですが、2コースに分けて2年次から大学進学コースと専門学校・就職コースというのを取ってくださっているんですけど、それをもう少しうまく市民にもアピールをしていただきたい。関西学院の指定校のお話もあります。また、市が補てんしている奨学金なんかもあります。それをもう少し知っていただきながら、学校現場の中で、四年制大学を目指す子どもたちへの強化といいますか、そちらもやりながら、今もやっけてくださっていることを、もう少しうまく市民にアピールするというような形が必要なんじゃないかと思っています。</p> <p>無理して上を目指すといいますか、難易度の高い所で勉強したいというニーズはあるんです。少々無理をしても、保護者は金銭的に比重がかかるわけですが、高知に行くとなったら完全に下宿から始まって、金銭的なバックアップが必要というわけです。そういったことを清水高校で解消できる。ぜひ、そういった学校を目指していただけたらと思います。</p> <p>二極化といいますか、両サイドが要るのかなと思います。清水高校として考える時に、就職の方も要るし、四大を目指すコースも要る。それにプラスして、市長が言ったような国際的な部分で、フェアヘーブンのとのつながりもあります。実質、もう200名近い子どもたちも留学をしております。それも大切にしながら、お願いできたらと思います。以上でございます。</p>
田村教育長	そのほか、よろしいですか。
竹島委員	<p>私も平成25年に学校訪問をさせてもらいました。本当にあの時は校長先生も本当に疲れていらっしゃって、私たちが行ったのに、まだ全然準備もされてなくて。今思えば、本当に大変だったんだなと思います。そのイメージを払拭されるのに、本当に皆さん努力なさって、ご苦労様でしたと申し上げたいです。</p> <p>今ふと思ったんですが、建物はすごく綺麗だったのですが、高台にはコンクリートばかりでした。当時の委員長がコンクリートばかりだから駄目なんだよとおっしゃっていました。もっと緑を置かないといけないと。もっと木を植えた方がいいと言われていたのを思い出しました。</p> <p>結局、清水中学校から高台に移転した場合、中村から来る時に、結構アクセスが大変だと思うんですけど、その辺は何かお考えのことはあるんですか。</p>
土佐清水市 市長	<p>たくさん家も増えまして、あの当時、5年前からいうと、3倍ぐらい家も建ちました。新しい自治会組織もこの4月から発足する状況になっております。交通の便について、学校のスクールバス以外にも、公共交通も朝の便はもう乗り入れしております。そういうまちづくりの観点を持って進めていきたいと思っております。また清水高校については、目ぼしい土地もあります。それはまた、県教委の方に具体的な提案もさせていただいておりますので、ぜひ早急な対応をお願いいたします。</p>
竹島委員	今流行りのコンパクトシティみたいな感じですかね。

土佐清水市 市長	<p>そうです。いわゆる高校自体もコンパクトな校舎で、清水中学校と連携して、使えるものは一緒に使って、共有していただきたいです。そういう中高一貫というのをさらに強めていきながら、コンパクトな清水高校を小さくてもすばらしい高校を目指して頑張りますので、よろしくお願いします。</p>
田村教育長	<p>ほかはよろしいですか。そしたら、何か最後はまとめていただいたような感じですけども。いつときも早く高台移転をというお話、それから、そういったことを通じて、地元からできるだけ多くの生徒が清水高校にというお話がありました。それから、定時制についても非常に、学ぶ機会を保障するという意味で、大事だというようなお話をいただいたと思っております。</p> <p>それでは、どうもありがとうございました。</p>

### ○会場からの意見聴取

田村教育長	<p>発言を予定していただいた皆さんからのご発言は以上でございますけれども、会場のなかから特にご発言をされたいというご希望がありましたら、お受けしたいと思えます。</p>
宿毛高校 同窓会長	<p>発言の機会を用意していただきまして、ありがとうございます。宿毛高校の同窓会長です。よろしくお願いをいたします。</p> <p>先ほどから、委員の方の質問のなかで、宿毛高校の応募が少なくなった原因で、何が原因なのかということで、そのような質問があったと思うんですが、はっきり言って、総合学科の分かりにくさです。総合学科というのは、土佐の教育改革から始まって、総合学科になって、今 14 年目だと思うんですが、当初は 150 人近くいた生徒が、今 80 人台になっています。その多くが、先ほど教育長の発言にもありましたが、市内から 40% 台の子どもしか宿毛高校に入学していません。僕は 10 年間ぐらい、PTA から始まって宿毛高校へ関わっているんですが、多くの保護者が言うのが、総合学科がよく分からないということです。1 年の夏休みの時に 2 年生からの科目選択をしなくてはいけない。どういうコースを選んだらいいのか、よく分からない。それに総合学科の良さが、各中学校の進路担当の先生に伝わっていない。そこが大きな原因です。どんなに説明しても、僕、PTA として 8 年間関わってきましたけども、どうせ高校で終わる人しか行けんがやろとか、どこの学校にも行けれん子が行く学校やろとか、未だにそういう判断をする保護者が多いです。</p> <p>そこを県教委として、やはり 10 年目の教育改革のところで、多分、総括で一度新聞にも出たことがあると思うんですが、各学校単位で、やはり総合的な評価をし、学校に対してまた保護者に対して、宿毛高校の総合学科はこういう学科で、こういうところに問題がある、こういうところに良さがあるっていうのを、しっかりと宿毛市内とか、大月、三原っていう地域の中学校であったり、保護者に対して報告すべきなんですよ。それをしてないから、特色が見えてこない。いつまでも今の状態が続いているっていうのが、僕はすごく感じます。それをやはり、しなければ、宿毛高校に今以上の定員増を望むことはできないと思えます。</p> <p>それと先ほど、どうやったら生徒が増えるかっていう質問もあったと思うんですが、はっきり言って、進路に対しての保障です。例えば、20 人でも 10 人</p>

	<p>でもいいですが、中村高校が特進クラスっていうのを持ったりとか、今あるかどうか知りませんが、国公立に対して進路保障しますよっていうクラスをつくる。宿毛高校で、例えば10人でも20人でもいいから、最初から国公立を目指して、進路を目指していけるコースをつくる。その子どもたちには最初から、科目選択じゃなくて、主要5教科については、この科目で、このカリキュラムでいきますっていうのを示して、各中学校にこういう指導をしますので、ぜひ宿毛高校におこしてくださいっていうことを言わない限り、進学希望の子は宿毛高校には来ません。そういうことをぜひお願いしたいと思います。</p> <p>先ほど、最後に泥谷市長がちょっと言っていました、清水高校、今の中学校の所に併設して、一貫教育をすれば清水高校も、今以上に清水高校に行く生徒は、清水から増えると思います。以上です。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。宿毛高校の生徒の応募が少ないのは、総合学科についての理解を十分得られてないということがあるんじゃないかと。そのことについて努力をするべきではないかというお話でした。また、生徒確保のためには、国公立大学進学について進路保障ができるような取組もすべきじゃないかというようなお話だったと思います。</p> <p>今のご意見について、何かご意見ご質問ありましたらお願いします。</p>
宿毛高校 PTA 会長	<p>本日はありがとうございます。宿毛高校 PTA 会長をしております。今日はこういう場に参席できて、ありがとうございます。</p> <p>実は、3年間の PTA 会長をさせていただいて、今日、町長さんや市長さん、並びに教育長さんの話を聴きながら、すごいなと思いました。本当にすごい教育のビジョンを持ち、各市町のビジョンを持っていらっしゃるんだなと改めて感動しました。同時に、ただ私3年間 PTA 会長をしながら、他の高校の PTA 会長とよく話をするんです。例えば、清水高校、あるいはもっと先に行った四万十高校、あるいは西土佐分校の大変さとか、共通点はバラバラなんです。</p> <p>それで一つは、地域性っていうのをすごく感じるんです。だから、清水だったら、清水はほかから入るよりは、地元で関わるしかないじゃないですか。だけど、大方は町だから、町長さんすごいなって思ったのは、町長さんのビジョンが小中高までいってるじゃないですか。</p> <p>今後の課題は、自分は PTA も今年卒業なんですけど、宿毛と中村は、今まで義務教育は結局、教育委員会は市じゃないですか。県立は高校じゃないですか。今日聴いて、ああ、やっと宿毛市も、あるいは中村市も、小中高、合わせたビジョンをこれから持てるんだなと思いました。どうしても町だったら、西土佐分校のように、そういう小さな所は小中高で考えないと。高校だけのけて考えられない。</p> <p>もう一つは、私 PTA 会長をやっていて、保護者があまりにも教育に対して無関心で必死になる人がいない。これは、皆さんのこれまで熱心な想いが保護者に向けて発信されていない。保護者がここに参席していないといけないと思います。教育の現場だけでは限界があると思います。</p> <p>特に先生方がもっと大変だと思うんです。今は行けば行くほど、教育に関わる校長先生から先生方が背負う、もうスマホの問題からいじめの問題から選挙の問題から、なおかつ、今回の再編に対しても、先生方に何をしろと言われても、それは難しいだろうと思います。やはりそこで、今日来てくれたOBの先</p>

	<p>輩方や地域の保護者がここにみんなが来て意見を出せるような環境ができないといけません。特に地方ですので、その魅力がなくなると、やっぱり高知市に行きますよね。</p> <p>だから、ぜひ今日のような、すごい町長さんのあのお話をどこかで保護者の前で弁論していただいて。あれだけの迫力があつたら、保護者もやっぱり考えると思いました。感動しました。ありがとうございます。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。それぞれの市長さん、町長さんからの色々なお話、そういう想いを保護者にも理解していただく。それで、保護者がこの教育に関心を持っていただくことがポイントじゃないかというお話だったと思います。</p> <p>今のご意見に何か、委員さんの方から特にご意見ご質問ございますか。</p> <p>よろしいでしょうか。あとございましたらお受けいたしますけれども、いかがでしょうか。</p>
西土佐 分校存続 委員会会長	<p>西土佐分校の存続委員会の会長をやっています。お疲れさまです。各地域の方のプレゼンを聴いて、色々思うところもあり、少しかわいそうだなと思うところもありました。</p> <p>定員についてよく話が出るんですけども、定員自体が少子化ということで、まず、この定員に近づけるっていうのは、どこの高校もかなり難しい状況です。定員数っていうのが在って無いような数だと思っています。これについても、15年前ぐらいにもう既に分かっていたことじゃないかなというのがありまして、非常に、この定員数っていうのに疑問があります。</p> <p>あと、小規模の高校の運営について、小規模でも運営をしていけるという、県の教育委員会の方が枠組みをつくってほしいなというのがあります。今後また10年、15年、もっともっと少子化になって、どこも子どもが足りなくなって、奪い合えば足りないというような状況になると思いますので、小規模高校の運営をどうするかっていうところをまず考えてほしいというお願いをいたします。</p>
田村教育長	<p>小規模でもっていうのは、今、1校あたり20人は確保したいというものがあるんですけども、もっと少なくというような意味合いでしょうか。</p>
西土佐 分校存続 委員会会長	<p>そうですね。20人という数じゃ、中学校の生徒数、あと小学校の生徒数もさかのぼって見ていただければ分かるんですけども、1学年でやっぱり11人とかいうクラスも出ています。これから20人を高校に定員を迎える、最低でも20人をというのはかなり難しいと思います。これは何年かけても難しいと思うので、20人という数自体を、もう一度見直してほしいです。10人でも小規模でもすばらしい高校としてやっていけるということを、地元のだこの各地域の方も、多分それは思っていると思います。やはり人数の20人というのは、ちょっと厳しいなというのは現実です。</p>
田村教育長	<p>ありがとうございました。その件について、特にご意見ございませんか。</p>
木村委員	<p>過渡期から日本という国がすべて合理性ばかり求めるようになった時期があるんですね。最近になって、やっと価値観が変わってきているんじゃないか</p>

田村教育長	<p>というふうに思います。それは、そこに住む人たちがどれだけ幸せをその地域で感じられるかということに、もっと重きを置かなければいけないということ。その地域で学ぶ子どもたちにとって、何が一番いいのかということを一義的にどうやったら考えていけるかということの方が単純な合理性よりもっと大事じゃないんだろうかという考えが今はもう常識としてあると思います。</p> <p>ただ、八田委員さんがおっしゃられたように、5人、6人で高校で学ぶ。ほかの人との切磋琢磨のないなかで過ごすのが本当にその子どもたちにとってベターなのかということ併せて考えていかないと、両面がありますので。</p> <p>含めて、子どもたちにとって何が一番いいのかということ主体的に、私は考えたいなというふうに思っています。</p> <p>はい。それでは、だいぶ時間も経ちましたけれども、特にありましたら、お受けいたします。あと一人ぐらい。</p> <p>よろしいでしょうか。それでは、どうもありがとうございました。</p>
-------	---

**【開会】**

田村教育長	<p>今日は、大変貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございます。冒頭で申し上げましたけれども、今日いただいたご意見は、われわれとして十分受け止めて、今後の計画作成に生かしていきたいと思っておりますので、どうもありがとうございました。</p>
出席者	<p>どうもありがとうございました。</p>